

令和7年度 セント・ピーターズバーグ市派遣 高校生親善研修生報告書

令和7年8月4日(月)～8月14日(木) 11日間



Takamatsu International Association
公益財團法人 高松市国際交流協会

目 次

1	セント・ピーターズバーグ市派遣親善研修生 日程表	1
2	フォトギャラリー	3
3	引率者感想文 (公財) 高松市国際交流協会 常務理事 青木 清安 「憧れのセント・ピーターズバーグ市」	5
4	親善研修生 報告書 I 香川誠陵高等学校 2年 宇都宮 純 日誌・活動記録	9
	感想文「出会いが彩った研修の日々」	20
5	親善研修生 報告書 II 香川県立高松高等学校 1年 藤井 咲羽 日誌・活動記録	21
	感想文「かけがえのない経験」	33
6	親善研修生 報告書 III 香川県立高松高等学校 1年 古市 隼翔 日誌・活動記録	35
	感想文「日米の違いと価値観の変化」	44

日 程 表

高松空港—タンパ空港

日付		便名	発着時刻
8/4(月)	高松空港 5:45		
出発	日本空港チェックインカウンター集合 【出発式】	JL474	7:05
到着	羽田空港		8:25
出発	羽田空港	JL012	10:55
到着	ダラスフォートワース空港		8:35
出発	ダラスフォートワース空港	JL7402	12:28
到着	タンパ空港 【現地お出迎え】		16:01

研修生：8/4(月)から8/13(水) セント・ピーターズバーグ市でホームステイ
 引率者：8/4(月)から8/9(土) セント・ピーターズバーグ市でホテルステイ

タンパ空港—高松空港

日付		便名	発着時刻
研修生： 8/13(水) 引率者： 8/9(土)	出発 【現地お見送り】	JL7375	7:30
	到着 ダラスフォートワース空港		9:20
	出発 ダラスフォートワース空港	JL011	12:05
研修生： 8/14(木) 引率者： 8/10(日)	到着 羽田空港		15:20
	出発 羽田空港	JL485	18:35
	到着 高松空港		19:50

令和7年度 セント・ピーターズバーグ市親善派遣研修生 日程表

令和7年8月4日（月）－8月14日（木）

日時	場所	研修内容
8月4日(月)	高松空港—タンパ空港	<ul style="list-style-type: none"> ・高松空港：出発式 ・ダラスフォートワース空港経由でタンパ空港へ ・SPIFFS【セント・ピーターズバーグ国際民族会】、ホストファミリーによる出迎え
8月5日(火)	ダリ美術館	<ul style="list-style-type: none"> ・サルバドール・ダリの作品鑑賞
	The Hangar Restaurant	<ul style="list-style-type: none"> ・歓迎夕食会
8月6日(水)	ダンカン・マクレランギャラリー	<ul style="list-style-type: none"> ・ガラス制作体験
	フロリダ クラフト アート	<ul style="list-style-type: none"> ・日本文化紹介(茶道・書道)デモンストレーション
	セント・ピート ビーチ アクセス	<ul style="list-style-type: none"> ・海水浴
8月7日(木)	セント・ピーターズバーグ市役所	<ul style="list-style-type: none"> ・高松市についてのプレゼンテーション ・ブランチ
	セ市研修生ジャクソン自宅	<ul style="list-style-type: none"> ・ファミリーバーベキュー
8月8日(金)	Sunrise Lanes	<ul style="list-style-type: none"> ・ボーリング
	タンパ湾	<ul style="list-style-type: none"> ・タンパ湾クルーズ
8月9日(土)	ブッシュガーデン	<ul style="list-style-type: none"> ・遊園地と動物園のあるテーマパーク
8月10日(日)	【ホストファミリーデイ】	
8月11日(月)	セント・ピーターズバーグ市街	<ul style="list-style-type: none"> ・インターナショナルショッピングモール等でショッピング
8月12日(火)	Osceola Fundamental High School (オセオラ ファンダメンタル高校)	<ul style="list-style-type: none"> ・高校で学校体験
8月13日(水)	タンパ空港	<ul style="list-style-type: none"> ・関係者、ホストファミリーのみなさんによる見送り
8月14日(木)	高松空港	<ul style="list-style-type: none"> ・研修生家族による出迎え



St. Petersburg Photo Gallery 2025

市長表敬



歓迎夕食会



高松市紹介
プレゼンテーション



書道・茶道デモンストレーション

セント・ピートビーチの夕日



タンパ湾クルーズ



オセオラファンダメンタル高校で学校体験



ダンカン・マクレラン
ギャラリー

ブッシュガーデン



みんなでボーリング

文想者率引

引率者感想文



憧れのセント・ピーターズバーグ市

(公財) 高松市国際交流協会

常務理事 青木 清安

まず、冒頭から話は逸れるが、実は私は昔から、セント・ピーターズバーグ市（以下、セ市）に一度行ってみたいと思っていた。このエピソードは、セ市からの研修生の歓迎夕食会の挨拶でも紹介したが、私が中学1年の時、担任だった英語教師が、夏休み前に、突然、高松市の姉妹都市であるセ市に派遣留学生として行くため、2学期から居なくなるということがあった。その教師は、1年余り経った後に、派遣留学を終え、学校に戻ってきたのだが、帰国後、英語の授業の中で、何度も何度もセ市は良いところだったと話をしてくれた。それを聞き、そんな良いところだったら、私も一度行ってみたいと思ったが、当時は、遙か彼方のアメリカである。夢の話だなと思い、叶うものとは考えてはいなかった。

その後、私も大人になり、また、時代が海外渡航のハードルを下げ、私も何度かアメリカへ行くことはあったが、セ市を訪れるることはなかった。

ところが、今年、現職への就任が決まる際、8月にセ市に引率者として訪れる予定があることを聞かされ、ふと47年前のことを思い出した。なんと47年越しの夢が叶うのだ。

話を戻して、8月4日早朝、5時45分に高松空港に集合し、今年の親善研修生の宇都宮さん、藤井さん、古市君の3名と私は、それぞれの御家族と今回の親善派遣研修担当の高松市国際交流協会の河野さん、旅行の手配をお願いした、㈱農協観光の弥勒院さんらに見送られ、7時5分発の日航機で高松を出発した。今年は、香川県で高校生の総文祭が開催されることで、研修の日程を例年より遅らせたのだが、機内は、同じく総文祭の終了を待っていたと思われる高校生でいっぱい、修学旅行にでも行くような雰囲気であった。そんな中、我々一行は、羽田空港で中継地であるダラス行きに乗換え、一路米国に向った。途中、ダラスでの入国審査の際、研修生の藤井さんだけが、理由なく別室に連れて行かれるという不可解なハプニングはあったものの、22時間にも及ぶ長旅を経て、現地時間の午後4時前に無事、タンパ国際空港に到着した。

空港のシャトルを降りて、前方を見ると写真で見慣れた顔が



セント・ピーターズバーグ
南ヨットハーバー



タンパ空港のフラミンゴの前で

すぐ目に飛び込んできた。親善研修の、セ市側の受入業務を担っていただいている SPIFFS（セント・ピーターズバーグ国際民族会）会長のスティーブンさんである。早速、彼と固い握手を交わした後、後方を見ると、同じく SPIFFS 事務局長のジョーエレンさん、日本に来ていた研修生とホストファミリーの面々が、歓待のプラカードを持って待っていた。彼らの熱烈な歓迎の後、恒例の空港内の大きなフランジゴの前で記念撮影をして、研修生はそれぞれのホストファミリーとともに帰宅、私はスティーブンさんの車でホテルへ迎い、セ市での活動がスタートしたのであった。



SPIFFS のスティーブンさん、
ジョーエレンさんとともに

今回、私が派遣された目的の 1 つが、今後の派遣研修における引率者の在り方の検証であり、滞在期間は短かったが、派遣研修についていろいろディスカッションすることができた。また、SPIFFS 及びセ市の皆さんとの御配慮で公式行事等を研修の前半に設定してもらったおかげで、3 人の研修生による、茶道や書道のワークショップ、市議会本会議場での高松市紹介のプレゼンテーションなど、しっかりと参加して確認することができた。

今回の 3 人の研修生は、海外渡航や、各種留学プログラム参加などの経験値が高く、大西市長も感心するほどの人材が揃い、現地でも、あの緊張する市議会での本会議中に行われたプレゼンテーションでも、最初の「緊張しています。」とは裏腹にセ市議会の議員さん達の笑いも取りながら堂々とこなしていたのには感心した。

彼らの現地での様子は、それぞれの報告書で詳細に記載されると思うので割愛し、私の所感であるが、まずセ市の、特にダウンタウンは、高松とよく似た街であると思った。中心部は比較的コンパクトで、少し汗をかけば、徒歩でもおおよその場所へ行けて、海が近く、治安も良い。一言で言うと居心地が良い場所だったという印象である。ついでに言うと、8 月頃の気候も高松と似たようなものだった。そんな中で見る、鮮やかな青い空と白い雲のコントラスト、そして海の眺めは、この街の一番の魅力だろう。



ダリ美術館と青い空



ウェルチ市長に親書を贈呈

私は、個人でアメリカへ行く際は、移動の足として、必ずレンタカーを使ってきた。公共交通機関が網羅されている欧洲などとは違い、クルマ社会のアメリカではクルマが無いと、どこにも行けないからである。今回は業務での渡米ということで、レンタカーは使わなかったが、セ市では、ダウンタウンのコンパクトさと、治安の良さのおかげで、たいていの場所には、フリーのループバスと徒歩で移動することができた。(もちろんダウンタウン周辺に限るが) そのため、SPIFFS に負



無料のダウンタウンループ

担をかけないよう、行事等の会場には、できるだけ自分で現地集合することにした。移動範囲の制約はあるものの、現地での活動に特に支障は無かった。

また、さすが 64 年前からの姉妹都市である。今回の短い滞在にも関わらず、セ市議会議員のコーリーさんをはじめ、高松へ来られたことのある人にもたくさん会えた。皆さん、高松で過ごした日々を懐かしがっておられ、今もなお高松に愛着を持っていてくれているようであった。高松の思い出を語る人々

の笑顔を見て、国際交流をやり続けることの大切さを再認識した。今回の研修生も、ホストファミリーはもとより、派遣の日程が遅くなつたおかげで、現地の学校の授業に参加できたこともあり、例年にも増して多くの人と交流し、親睦を深められたようだった。セ市と高松市、遠く離れた両市の間で、また一つ交流の輪が大きく広がったように思う。この関係が未来永劫続くように、このプログラムが今後も続けられるように、今回ここに来なければ分からなかつたこと、直接聞かなければ知らなかつた課題を解決し、より良い親善派遣研修となるよう取り組んでいきたい。

いずれにしても、今年度のセ市親善派遣研修を、事故や大きなトラブル無く終えることができ、今はとにかく安堵しているところである。

また、宇都宮さん、藤井さん、古市君の 3 人の研修生も、この研修を通じ、それぞれが多くの大切なものを得たという感想を聞き、我々高松市国際交流協会として、うれしい限りである。セ市のジェイダさん、レイチェルさん、ジェレッド君らとともに、この経験を今後の人生に生かしつつ、またいつかどこかで、高松市とセ市の国際交流に貢献していただければ幸いである。

最後に、今回の研修を献身的にサポートしていただいた SPIFFS のスティーブンさん、ジョーエレンさんをはじめ、ホストファミリーの皆さん、高松市、セ市関係者、事前研修の講師の先生方、そして研修生の御家族の皆さんなど、この親善派遣研修に関わっていただいた全ての方々に感謝して、この文を結びたい。長年憧れたセント・ピーターズバーグ市はやっぱり「良いところ」だった。



アメリカといえばステーキ



市議会議員のコーリーさんと

親善研修生 報告書 I

親善研修生 報告書 I

日誌・活動記録

香川誠陵高等学校 2年 宇都宮 紗

8月4日(月)

出発の朝、前日まで学校の合宿に参加していたこともあり、正直なところ体はへとへとだった。セント・ピーターズバーグ市への期待や家族との別れの寂しさよりも、「忘れ物なく空港にたどり着けるか」「時間通りに動けるか」という現実的な心配の方が大きく、気持ちに余裕はなかった。家族との別れもそこそこに、搭乗ゲートの待合スペースに腰を下ろしたとき、ようやく少しだけ安心することができた。



ダラス空港にて

高松から羽田までの空の旅はあっという間に過ぎ、羽田空港では「最後の日本食」として天丼を食べた。値段の高さに驚きつつも、アメリカの物価はこの比ではないだろうと藤井さんや古市くんと3人で笑いあった。

羽田からダラスまでの長時間フライトでは、見たかった映画を鑑賞したり、藤井さんに借りた小説を読んだりして過ごした。疲れはあったが、これから始まる10日間に向けて心を整える静かな時間でもあった。

ダラスに到着すると、空港に流れる英語のアナウンスや見慣れない風景の一つひとつに、「本当に異国に来たのだ」という実感が胸に広がった。アメリカでの最初の買い物は、スターバックスの「マンゴー・ドラゴンフルーツ・リフレッシュ」。鮮やかな色合いとフリーズドライのドラゴンフルーツが印象的で、想像以上にさっぱりとした味わいだった。いつかまた飲みたいと思うほどの一杯だった。

その後のダラスからタンパへの移動では、これから同じ時間を過ごすことになるセント・ピーターズバーグ市の研修生ジェイダと、彼女の母ジーナのことを考えていた。ジーナとはまだ面識はなかったが、どんな日々が待っているのか、期待と少しの緊張が入り混じっていた。

タンパ空港に降り立つと、すぐにホストファミリーが出迎えてくれた。ジェイダは、私の名前と桜の絵を描いた画用紙を掲げて笑顔で手を振ってくれ、その姿に思わず胸が熱くなった。母のジーナも初対面とは思えないほどフレンドリーで、安心感を与えてくれた。

他の研修生たちと別れて車に乗ると、以前私がジェイダに勧めた日本の曲を流してくれ、心の距離が一気に縮まったように感じた。家に着くとジェイダが家の中を案内してくれた。どの部屋も素敵で、初めて訪れる家なのに不思議と落ち着ける雰囲



ジェイダとの再会

気があった。

一息ついた後は3人でスーパー・マーケットや服屋を巡った。スーパー・マーケットには日本の商品も多く並んでおり、異国でありながら親しみを感じた。服屋では思いがけず2人から赤いワンピースをプレゼントしてもらいや、とても嬉しかったのを覚えている。

一日目の最後は、安心と疲労に包まれながらベッドに横たわった。「これからどんな日々が待っているのだろう」という期待を胸に、静かに目を閉じた。



スーパー・マーケットで買い物

8月5日（火）

朝9時からガラス制作体験の予定だったため、ジーナが焼いてくれたパンケーキを朝食にとるとすぐに出発した。しかし車に乗ってから、手違いでガラス制作体験が翌日になったことを知らされ、急きょダリ美術館へ行くことになった。予定変更に驚きながらも、ダリ美術館はセント・ピーターズバーグ市で最も楽しみにしていた場所のひとつだったので、期待が高まった。

開館までの時間は、他の研修生たちと写真を撮ったり、景色を眺めたりして過ごした。太陽の照りつける暑さに少し疲れ始めていたので、開館時刻になり扉が開いた瞬間は、吹き抜ける冷気にはっとしたのを覚えている。

館内に入ると、真っ白な電話機にロブスターが乗った作品がまず目に飛び込んできた。電話越しに質問するとAIが答えてくれる仕掛けで、ジェイダが試すと「ダリの声」が流れ出し、私たちは思わず笑ってしまった。さらに進むと、ダリ独特の作品たちが並んでいた。私は美術の授業で扱った絵を見つけ、实物を目にできたことに感動した。けれど正直なところ、ダリの思考は複雑すぎて理解できず、ジェイダと「これはどういう意味だろう」と感想を言い合いながら楽しんだ。特に印象に残っているのは、ガラという名の女性を窓辺に描いた作品で、離れた場所から見るとリンカーンの肖像画が浮かび上がるというものだった。最初はリンカーンに気づいておらず、たまたまそばにいた男性に「ここから見ると見えるよ」と教えてもらい、ワクワクしながら試すとはっきりと姿を確認できた。また、自分の顔を壁画の一部に映し込めるモニターもあり、来館者を楽しませる工夫が随所に感じられた。最後に、出口のそばに色とりどりのリストバンドが結びつけられた木を見つけ、私たちもそれに参加した。見た目はまるで七夕の短冊のようで、国は違っても「想い出を残す」という考え方方は共通していると感じた。

帰宅後はジェイダに「マンカラ」というボードゲームを教わった。カラフルな石を動かすゲームで、単純なルールながら奥が深く、夢中になって何度も勝負した。結局ほとんど勝つことはなかったが、



ダリの溶けたベンチで



ジェイダとマンカラ

負うことさえ楽しかった。その後はトランプで遊び、とても楽しい時間だった。

少し昼寝をして、歓迎夕食会に出かける時間になった。前日にプレゼントしてもらった赤いワンピースを着て会場へ向かった。レストランには多くの人が集まっており、どの人も私たちを温かく迎えてくれた。ジェイダのおばあちゃんにも初めて会うことができ、うれしかった。バイキング形式の料理はどれも美味しく、デザートのケーキも楽しみにしていたが、私が選んだものは驚くほど甘くて衝撃を受けた。これもまた、アメリカらしい体験だったと思う。

一日を振り返ると、予定変更から始まった日だったが、おかげでダリ美術館という特別な体験を得ることができた。笑ったり驚いたりしながら、二日目はあっという間に過ぎていった。

8月6日(水)

少し肌寒さを感じたためか夜中の2時頃に目が覚めてしまった。なかなか寝付けず、荷物を片づけたりメールに返信したりしているうちに、いつのまにか再び眠りに落ちていた。ジーナに起こされるともう出発の時で、慌ただしく一日が始まった。

午前中の予定は、待ちに待ったダンカン・マクレランギャラリーでのガラス制作体験だった。最初に挑戦したのはガラス吹きで、ジェイダに加え、研修生のレイチエルと3人で体験した。それぞれ自由に作品の色を選び、ジェイダは明るいピンク、レイチエルは複数の色を混ぜ、私は迷った末に見本に置かれていた、赤をベースに何色か散りばめられたものを使うことに決めた。インストラクターの男性が丁寧に教えてくださったのでほとんどの工程はスムーズだったが、最後の竿を叩くことで作品を切り離す工程は、思うように力が入らず苦戦した。やっと完成したガラス



ガラス作品に囲まれて

玉は光に透かすと輝いて、達成感でいっぱいになった。

続いてはオリジナルの皿づくり。大小さまざまなシールから好きな模様を選んで配置する。私は海や花のモチーフを選んだ。レイチエルも私と同系統のシールを使っていたが、皿の上下を巧みに使って、さながらサンゴ礁のような作品を作っており感心した。ジェイダは蝶を中心にデザインしており、どこか前向きになれるような仕上がりに快活な彼女らしさを感じた。制作中、私はハイビスカスのシールに挑戦したかったが、模様の細かさに断念した。ただ全体的にやや早めに作業が終わったので、挑戦してみても良かったかもしれないと少し悔やんだ。

昼食のサンドイッチを待つ間、インストラクターの男性が壺づくりを実演してくれた。赤々と燃える炉の前で形を変えていくガラスに目を奪われ、同時に、この暑さの中で毎日作品を生み出す職人さ

んの技術に感嘆した。やがて届いたサンドイッチは硬めのパンにターキーが挟まれていてボリューム満点。美味しかったが食べきれず、アメリカの食文化の豪快さを実感させられた。



茶道デモンストレーション

午後はフロリダ・クラフト・アートに移動し、茶道と書道のプレゼンテーションを行った。私は茶華道部に所属しているので茶道を担当した。実際に茶道具を前に立つと背筋が伸び、緊張が一気に押し寄せた。立ったまま行うお点前だったのでごちんさが否めなかつたが、周囲のサポートに助けられなんとかやり遂げた。片づけの合間に多くの人から『とても美しかった』と声をかけてもらい、その言葉に救われる思いがした。書道を担当した吉市くんや藤井さんのプレゼンテーションは、観客が楽しそうに眺めていて頬もしさを感じた。

帰宅後はジェイダとマンカラに興じながらひと息つき、夕方にはセント・ピートビーチアクセスへ向かった。途中で立ち寄ったのは、メキシコ料理店の CHIPOTLE。メキシコ式の丼であるブリトーボウルを食べるのは初めてで、具材を一つひとつ選んでいく形式に戸惑ったが、ジェイダが助けてくれて心強かった。

砂浜で海を見ながら食べたブリトーボウルはスパイシーで独特の風味があったが、野菜が辛さを和らげてくれたおかげで最後まで楽しめた。

食後は研修生同士で海に入ったが、私は体調が優れず水際で足を浸すだけにした。日本よりも海水があたたかく感じ、自然の雄大さを実感した。海に入れない私のために砂浜に名前を書いたり、貝殻を拾ったりしてくれたジェイダやジーナの笑顔が、優しい思い出として残っている。

そして一日の締めくくりは夕日。水平線に沈んでいく太陽を全員で静かに見つめた瞬間、言葉にできない一体感があった。きっと帰国後も、夕日を見るたびにこの日の光景を思い出すのだろうと思った。こうして三日目は、慌ただしい始まりから感動に満ちた終わりまで、心に深く刻まれる一日となった。



夕日を背にビーチで

8月7日(木)

前日の帰宅が遅く、もう少し寝ていたい気持ちもあった。けれど、この日は高松市紹介のプレゼンテーションや市長表敬という大きな仕事を控えていたので、気を引き締めて早めに起きた。朝食前に台本を確認し、緊張感を抱えながら家を出た。

市役所の入口では荷物検査を受け、厳重な警備に少し驚かされた。会場は広々としており、歓迎夕食会でお会いした議員さんや市民の方々も多く集まっていた。市議会が始まると、市民が次々と登壇

し、自分の意見を堂々と述べ、それに議員たちが真剣に耳を傾ける姿が印象的だった。日本よりも政治参加への意識が強いと感じた。



高松市中央卸売市場プレゼンテーション

やがて発表の時間となり、私はトップバッターとして高松市中央卸売市場を紹介した。市場の人々が何時に起きるかを当てるクイズを用意し、選択肢に「寝ない」という答えを加えておいたところ、思いがけず大きな笑いが起きた。場の空気が和み、楽しみながら市場の役割を伝えることができたのは嬉しかった。発表を終えると肩の力が抜け、藤井さんや古市くんのプレゼンテーションも落ち着いて楽しむことができた。二人の発表は以前練習を聞いた時よりも洗練されていて、一度傾聴した身からしても新鮮だった。

続く市長表敬では、讃岐一刀彫のだるまを市長に贈呈する役目を果たした。ウェルチ市長は私のつたない英語にも丁寧に耳を傾けてくださり、温かさと親しみやすさが伝わってきた。

市役所を出たあとは近くのカフェでランチをとった。どの料理も初めて見るものばかりで迷っていると、ジェイダがワッフルチキンを勧めてくれた。フライドチキンがワッフルの上に載り、さらにメープルシロップをかけるという大胆な組み合わせに最初は戸惑ったが、意外にも相性がよく驚いた。けれど、やはり別々に食べる方が自分の好みには合っていた。

午後は他の研修生たちと別れ、学校と教会が併設された施設に向かった。ジーナが多くの人を紹介してくれ、どの人にも温かく迎えてもらえた。ジェイダには学校内を案内してもらった。外観から想像していたよりも広く、体育館も完備されており、活気あふれる教育環境だと感じた。やがて人影の少ない教会に移動すると、ジェイダが教会についても多くのことを教えてくれた。過去の映像を見せてもらうと、大勢の前でダンスのパフォーマンスをしているジェイダが映っていて本当に驚いた。私にとって教会は静かで厳かな場所という印象が強かったが、そこは想像以上にアクティブで、日常に根付いた空間だった。毎週日曜日には必ず教会に行くと聞き、この週末一緒に行くことを約束した。

夕方には研修生のジャレッドの家でバーベキューが予定されており、途中のスーパーで飲み物を購入した。お茶好きの私たちは緑茶を選んだが、実際に飲むとフルーティーで甘く、日本で慣れ親しんだ味とは大きく異なっていた。私は一杯で断念し、水に切り替えた。

ジャレッドの家にはすでに料理が並び、準備までの時間は皆でトランプを楽しんだ。バーベキューではポテト、トウモロコシ、ワインナー、エビが用意され、特にポテトは絶品だった。

食後は「ティーンビーチムービー」という映画を鑑賞した。英語字幕のおかげで内容をほとんど自力で追うことができ、少しずつ語学力が身についていると実感できて嬉しかった。音楽とダンスがふんだんに盛り込まれたミュージカル映画は、日本ではありません馴染みのないジャンルなだけに新鮮で、最後まで楽しむことができた。



バーベキュー開始

振り返ると、この日は大きな発表を終えた達成感とともに、文化の違いや新しい経験に触れられた一日だった。すべての思い出が強く心に残り、研修の充実を実感する時間となった。

8月8日(金)

家の近くにあるボウリング場が目的地だったため、この日は比較的ゆっくりと朝を迎えることができた。

会場に着くとすぐにゲームが始まり、レイチェルの見事な腕前に驚かされた。彼女の投球は正確で、次々とピンを倒す姿は見ていて爽快だった。私はこれまであまりボウリングの経験がなく最初はぎこちなかつたが、ジェイダやジーナにフォームを教わるうち、少しづつ感覚をつかむことができて嬉しかった。

ゲームを終えると、昼食を調達するためにファストフード店「Popeyes」に立ち寄った。大量の注文だったせいか料理が出てくるまでに時間がかかり、受け取るや否や急いで車に乗り込んでタンパ湾クルーズへ向かった。船に乗り込んだときにはほっと一息つき、ようやく落ち着いた気分でチキンテンダーやフライドポテトを口にした。チキンはジューシーで、日本ではなかなか味わえないおいしさに夢中になった。

やがてクルーズが始まり、海風を感じながら景色を眺めていると、スタッフの方がバケツに海水を汲み、小さなカニや魚を見せてくれた。間近で観察する体験は新鮮で、思わず見入ってしまった。さらに船長さんが「イルカが出た」と知らせてくれ、船を近くまで寄せててくれた。海面から背びれがのぞくだけだったが、野生のイルカを初めて見ることができ、胸が高鳴った。沿岸には豪奢な建物が立ち並び、澄み渡る青空と相まって、どこか非日常の世界に迷い込んだような気持ちになった。

下船後は軽く出店を見て回り、記念写真を撮ってから他の研修生たちと別れた。夜にはレイチェルの家に宿泊する予定があったため、一度帰宅して準備を整えた。外に出ると激しい雨が降っており、しばらく家で待機することになったが、ジェイダとマンカラをして過ごす時間は楽しいひとときとなつた。

雨が小降りになったところでレイチェルの家に向かった。到着すると近所の人も来ていて、和やかな雰囲気の中それぞれが自由に選んだ食材を載せてピザを焼いていた。私は出来上がったものをいくつか分けてもらった。藤井さんと古市くんが作ったピザはシンプルながら味のバランスが良く、いくらでも食べられるような美味しさだった。一方、ジャレッドが作ったピザは昼に残したPopeyesをトッピングした豪快な一品で、いかにもアメリカらしいジャンクな味わいだった。

お腹が満たされると疲れが出てソファでうとうとしてしまった。するとレイチェルと彼女のお父さんがソファを解体してベッドにしてくれた。思いやりのこもったその気遣いがありがたく、みんなの笑い声や話し声をBGMにしながら、心地よい眠気に身を任せた。



船上の私たち

8月9日(土)

この日は、研修中ずっと引率してくださっていた（公財）高松市国際交流協会 事務局長の青木さんが日本へ帰国される日だった。見送りに行くことはできなかったが、これまで支えてくれていた方が不在になることに、心細さと寂しさを覚えた。

前夜はソファベッドで最初に眠りについた私だったが、朝目を覚ますとすでにみんなが起きていて驚かされた。朝食にはパンケーキが並び、定番のものに加えてレーズンやチョコチップ入りもあった。私が選んだレーズンのパンケーキは程よい甘さで、何枚でも食べられそうなおいしさだった。食卓を囲みながら迎えた一日の始まりは、緊張と楽しみが入り混じる中で心を和ませてくれた。

向かった先は「ブッシュガーデン」という大型の遊園地だった。動物園も併設されており、ワニやチーター、チンパンジー、ゴリラ、フラミンゴなど、普段はなかなか見ることのできない動物を間近に見ることができた。しかしやはりメインは遊園地のアトラクションで、中でもジェットコースターは豊富な種類があり人気を集めていた。



これからジェットコースター

最初に挑戦したジェットコースターは行列が長く、さらに途中で運行が一時停止したため乗れるかどうか不安になった。それでも何とか順番が回ってきて、いざ乗車すると、風を切って疾走する感覚に圧倒され言葉を失った。隣に座っていたジェイダは終始大声を上げて楽しんでおり、私と対照的な姿が印象的だった。続いて挑戦した二つ目のジェットコースターは、足を宙に浮かせたまま進むタイプ

で、こちらは一つ目よりもスリルと爽快感を同時に味わうことができ、純粋に楽しめた。

その後はお化け屋敷にも足を運んだが、恐怖を煽るような仕掛けはほとんどなく、スタッフさんが「クモの巣はグルーガンで作っている」といった舞台裏の解説を丁寧にしてくれるというアトラクション内容に拍子抜けした。お化け屋敷が大の苦手な私でさえも全く叫ばずに終わり、アメリカのアトラクションの多様さを感じさせられた。

昼食はファストフード店「Chick-fil-A」でとることにした。注文の列に並んでいた時、暑さのせいか体調を崩してしまい、食欲もわからなくなってしまった。そのことを伝えると、ジェイダがフライドポテトとナゲットをシェアしようと提案してくれた。ポテトはワッフルのような網目模様で見た目にもおもしろかったが、結局ほとんど食べられなかつた。それでも「一緒に食べよう」と声をかけてくれた気持ちがありがたく、彼女の優しさが心に染みた。冷たいお茶を飲むと少しづつ体調も落ち着いたが、再びアトラクションを楽しむ元気は戻らず、午後は園内のベンチで休んで過ごすこととした。もっと多くの乗り物に挑戦したかっただけに残念ではあったが、それもまた一つの経験になったと感じている。

この一日を振り返ると、スリルと驚き、そして体調不良による悔しさと、さまざまな感情が入り混じった日となった。同時に、仲間の思いやりや支えを改めて感じることができたことも大きな収穫だった。遊園地という非日常の空間で過ごした時間は、ただ楽しいだけでなく、人とのつながりの温かさを実感させてくれる大切な思い出となった。

8月10日(日)

楽しみにしていたファミリーデーの朝。教会に行くために自校の制服に袖を通すと、いつもとは違う特別感に胸が高鳴った。

礼拝の場に足を踏み入れると、信者の方々が整った服装で集まっており、自然と背筋が伸びた。ステージ両脇のモニターには教会についての映像が映し出され、歓迎の文章が並んだ冊子が配られた。やがて司会の男性の声とともに礼拝が始まり、モニターにはリアルタイム映像や、信者の方々の近況報告のような映像が次々と映しだされた。すると突然、

ジェイダと私を紹介する映像が流れ驚いた。事前にジーナが準備してくれていたサプライズだった。紹介のあとジェイダに促され立ち上がると会場全体から温かな拍手が送られ、思わず笑顔になった。その後も子どもたちによるパントマイムのようなダンスや全員でのお祈りなど、日本では味わえない体験が続き、礼拝後もジェイダの友達とも言葉を交わして楽しく過ごした。

礼拝後はジェイダのおじさんの家を訪問した。車の修理をお願いするためだそうだ。リビングにはジェイダの家で見覚えのある写真がたくさん飾られており、家族のつながりの強さが感じられた。修理を待つ間はジェイダと多機能ソファに座り、背もたれや足置きをボタンで調整しては笑いあつた。ささやかな時間も印象深かった。

昼食は海沿いのレストラン「Doc Ford's Rum Bar & Grille」へ。以前「ハンバーガーを食べたい」と伝えていたことを覚えてくれていて、念願が叶った。運ばれてきたハンバーガーは具材たっぷりで、今まで食べたどのハンバーガーよりも美味しかった。爽やかな味わいのアイスティーもハンバーガーにぴったりで、ジーナがティクアウト用にも一つ注文してくれ、その心遣いが嬉しかった。食後には海辺を散歩し、近くの建物に上って海を一望した。青空と海の広がりが重なり、忘れない光景となつた。帰りにはスーパーに立ち寄り、充実感に満たされた。

夕食にはトルティーヤが用意され、普段はテーブルを囲むところ、この日はカーペットに座りながら日本滞在中のジェイダを映した動画を観ることにした。そこには彼女とホストファミリーの思い出の数々が映っており、見てるだけで心温まる映像だった。同時に、彼女のホストファミリーをすることことができなかつた私をここまで大切にしてくれるジェイダとジーナとの絆をあらためて実感した。

動画終了後も夜はまだ続いた。日本の YouTube 動画を見たいと言われ、「日本語ばかりでおもしろくないと思うよ」と前置きしながらも紹介してみると、意外にも好評で、言葉の壁を超えて笑い合えることを実感した。その後はジーナの好きなリフォーム番組や、子どもたちの料理対決番組と一緒に鑑賞し、日本では見られない地元番組のおもしろさを堪能した。

振り返ると、この日は温かな交流と新しい発見に満ちていた。間違いなく、この10日間で最も楽しい一日だった。



教会で信者の方々と

8月11日(月)

日本人研修生三人だけで出かける最初で最後の日。お土産をほとんど買えていなかったことに加え、連日の暑さもあり、親善研修生事業を支えてくださっているSPIFFS（セント・ピーターズバーグ国際民族会）のスティーブンさんが、大型ショッピングモールや地元のお店に連れて行ってくれた。



CHIPOTLE 再び

最初に訪れたのは、セント・ピーターズバーグ市のオリジナルグッズを扱うお土産ショップ。爽やかな色合いのTシャツや可愛い雑貨、アメリカならではのお菓子を購入した。店員さんはとても親切で、紙製のバッグのデザインを褒めると「楽しんでね」と言って一つおまけに渡してくれた。ちょっとした心配りに、街の温かさを感じた。

続いて向かったのは大型ショッピングモール。古市くんは目当ての店に足を運び、私は藤井さんと一緒に店内を見て回った。華やかな服やアクセサリーが並ぶ中、気軽に手に取れるものは少なかったが、ジューススタンドで珍しいフレーバーのジュースを試し、二人でフルーティーな味を楽しんだ。偶然古市くんとも合流することができ、スティーブンさんの待つフードコートへ。昼食は各自自由に注文することになり、私は以前食べたブリトー・ボウルの味が忘れられず、CHIPOTLEの列に並んだ。今回は一人で注文しなければならず少し緊張したが、店員さんの丁寧な対応に助けられ、無事にオーダーを終えることができた。自分の力で注文できたという達成感も加わって、味は一層格別に感じられた。

その後、私の希望で地元のスーパーにも立ち寄った。スティーブンさんに「アメリカらしい商品はどれですか」と尋ねると、お茶やお菓子などを一つひとつ説明してくださり、納得のいく買い物ができた。帰宅するとジェイダとジーナに迎えられ、以前一緒に買った抹茶のハーゲンダッツを食べながら午前中の出来事を話した。何気ないやり取りの中にも、家族のような温かさを感じた。

ひと休みしてから向かったのは送別会の夕食会。これまでお世話になったホストファミリーや関係者の方々が集まっており、笑顔があふれる一方で、別れを意識せざるを得なかった。料理は海鮮を使ったクリームスパゲッティを選んだ。アメリカで初めて食べたスパゲッティはまろやかで、日本のものに近い慣れ親しんだ味に少し安心した。食後には、フロリダ名物のキーライムパイを注文。タルトのような見た目で、口に入れると爽やかな香りが広がった。最初は軽やかな味わいだったが次第に強い甘さが際立ち、食べるのは難しかったものの、地元ならではのデザートを味わえたことは貴重な経験となった。

一日を終えて振り返ると、買い物や食事といった何気ない出来事の中にも、現地の人々の温かさや文化の違いを感じる場面が多かった。自分で英語を使って注文できた小さな成功、スーパーで見つけたアメリカらしい商品、そして送別会で囲んだ食卓。どれも旅の終盤を彩るかけがえのない思い出となった。

8月12日(火)

ついに、私が最も楽しみにしていた高校訪問の日がやってきた。将来教育に関わる仕事を志す私にとって、現地の高校で授業や学校生活を体験できるこの日は絶好の機会だった。

早朝に目覚め荷物をまとめると、帰国が翌日に迫っていることを実感した。まだ暗い中、ジェイダを起こさないようそっと家を出て、ジーナとともに藤井さんや古市くんと合流するためレイチェルの家へ向かった。レイチェルのお父さんが運転する車に乗るとすぐに眠ってしまい、後から見たレイチェルが撮った写真には、天を仰いで眠る古市くん、うつむき加減の私、そして起きている藤井さんが写っており、思わず笑ってしまった。

訪問先はレイチェルの通うオセオラ・ファンダメンタル高校。まず、この日一日案内をしてくれるアイラを紹介された。快活で親しみやすい彼女と一緒に、最初に受けたのはスペイン語の授業だった。先生は陽気で自由な雰囲気を作り出し、クラスは活気に満ちていた。周囲が各々スペイン語で家族の紹介文を書く中、私はアイラの提案により英語で紹介文を書くことにした。ふと目線を上げるといつの間にか先生が目の前に立っており、日本のどこが出身地なのかを尋ねられた。「香川」も「高松」もうまく伝わらなかったが、周囲の生徒が興味を持ってくれたようで、隣の男の子が「お元気ですか」と日本語で声をかけてくれた。発音を褒めると「今調べたんだ」と照れ笑いし、温かい交流を感じた。

次の生物では、紙に人体を描き臓器を書き込むグループワークを体験した。私も一部を手伝わせてもらったが、日本語でも知らない器官をすらすら書く



授業中

彼女たちの知識量に驚かされた。結果的に私たちの

グループの人体図が投票で1位を取り、皆でハイタッチを交わした。

昼食時には藤井さんや古市くんと合流し、持参したサラダやパンを食べた。日本のお弁当文化との違いが新鮮だった。

午後の英語の授業ではパソコンを使って自分の名前とブランド名を組み合わせる作品づくり活動を体験した。基本的に教科書とノートで取り組む日本の授業とは雰囲気が異なっていると感じた。

数学では「少し厳しい先生」と聞いて緊張したが、実際はとても優しく、過去に出会った日本人が書いたという自分の名前を見せてくれた。授業はデータ分析の単元で、クラスメートに質問をして回答の傾向を調べる活動を行った。私にも簡単な質問をしてくれ、楽しく参加できた。

最後には校長先生とお会いする場を設けていただいた。背の高い方で、差し上げた「うどん脳」の張り子を大変喜んでくださった。お礼に学校オリジナルTシャツやグッズをたくさんいただき、恐縮してしまった。

放課後は再びレイチェルの家に戻り、感謝を込めてジェイダたちに色紙を書いた。ジェイダの名前には「慈瑛宝」という漢字をあて、「思いやりの心を持ち、宝石のように輝く人」という意味を込めた。彼女はとても喜んでくれ、私も嬉しかった。

その後ジェイダと彼女のおばあちゃんと家に帰ると、おばあちゃんからセント・ピーターズバーグ

らしいデザインのエコバッグとタンブラーをいただいた。短い交流にも関わらず温かく迎えてくださり、胸が熱くなった。

夕食はジーナ特製のチキンカレー。料理上手なジーナに翌朝のメニューの希望を尋ねられ、パンケーキをお願いすると笑顔で快諾してくれた。

そして最終夜、スーツケースを整理しているとジェイダとジーナからパンケーキの粉やワッフルメーカーなど、多くの贈り物をもらった。中でも特に嬉しかったのは、10日間の思い出を一冊にまとめた手作りのアルバムだった。その重みが、この滞在のかけがえのなさを物語っているように感じた。

何度も感謝を伝えたが、まだ話し足りない思いを抱えたまま、翌日のフライトに備えて眠りについた。胸に広がっていたのは、セント・ピーターズバーグで過ごした温かな日々の思い出ばかりだった。



ジェイダと最後の夕食

8月13日(水)

とうとうアメリカから出国する日がやってきた。前日にお願いしていた通りにジーナが焼いてくれたパンケーキをジェイダと一緒に食べ、まだ暗い空の下出発した。車内では、感謝と楽しかった思い出を語り合いながら時間が過ぎていった。

藤井さんや古市くんと合流すると、ついに帰国するのだという現実を突きつけられたような気がした。搭乗の手続きの際、荷物の重量が少しオーバーして困っていると、古市くんが自分のスーツケースに私のアルバムを入れてくれ、そのさりげない優しさに救われた。

「また会おう」と約束はしたものの、しばらくは叶わないことも分かっている。寂しさを抱きながらも、最後は笑顔で別れの挨拶を交わし、飛行機へと向かった。

機内では映画をいくつか見たが、眠気もあって行きのフライトより短く感じられた。目を閉じると、出会った人々の温かさや鮮やかな景色が次々と思い出され、この経験が自分にとってかけがえのない宝物となったことを、改めて深く実感した。

8月14日(木)

羽田に到着すると、周囲から聞こえてくる日本語に、ようやく帰国したのだと実感した。羽田から高松までもあつという間で、振り返れば濃密で非日常だった10日間がすでに遠い出来事のように感じられ、むしろ今こうして帰国している自分が現実離れしているように思えた。

高松空港では、高松市国際交流協会の方や家族が迎えに来てくれていた。見慣れた顔に会った瞬間、緊張がふっと解け一気に安心感が広がった。

この10日間で得た学びと出会いは、どれもかけがえのない財産だ。貴重な体験を胸に刻み、この日々をいつまでも忘れずにいたいと思う。

感想文



出会いが彩った研修の日々

香川誠陵高等学校 2年

宇都宮 紗絵

現地で出会った人々の温かさが、今回の研修を忘れられないものとして彩ってくれました。出発前は「自分の英語でどこまで伝えられるのか」という不安が大きく、正直なところ緊張の方が勝っていました。しかし実際に現地で出会った人々は、私の言葉をじっと聞き、笑顔で受け止めてくれました。その優しさに何度も背中を押され、自然と緊張がほぐれていきました。特にホストファミリーのジェイダとジーナは、私を本当の家族のように迎えてくれ、小さな日常の一つ一つが特別な思い出になりました。

今回の研修で最も印象に残っているのは高校訪問です。将来教育に関わる仕事を志す私にとって、現地の授業に参加し、同世代の生徒と共に学ぶことは大変貴重な機会でした。言葉の壁を感じる瞬間もありましたが、クラスメートたちは気さくに話しかけてくれ、一緒に活動に取り組む中で少しづつ意思疎通の喜びを感じることができました。授業の中で互いの意見を尋ね合ったり、グループでポスターを作成したりする経験は、自分の考えを形にして伝える大きさを教えてくれました。また、日本とは異なる授業の進め方や生徒同士のやり取りを間近で見ることで、教育現場に必要な柔軟さや協力の重要性も実感しました。

滞在中は体調がすぐれない時もありましたが、その度に周囲の人たちが気遣ってくれました。小さな声かけやさりげない配慮が、どれほど力になるか心に刻まれました。支え合いながら過ごす時間を通して、人とのつながりの尊さを改めて感じるとともに、日常の中で誰かに寄り添うことの大切さも学ぶことができました。

帰国前夜にいただいた手作りのアルバムは、私にとってこの10日間の思い出を象徴する宝物です。ページをめくるたびに、笑顔や驚き、学びの瞬間が鮮やかに蘇り、研修で得たすべての経験を思い返すことができます。

私はこの研修を通して、挑戦することの意味と、人との絆が持つ力を学びました。言葉に自信がなかった私でも、勇気を出して一歩踏み出せば理解し合える喜びがあること、そして思いやりや配慮が人との関係をより深めることを、身をもって体験しました。今回の経験を糧に、これからも国際交流の場に積極的に参加し、視野を広げ続けたいと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった高松市国際交流協会の皆様はじめ、支えてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。

親善研修生 報告書 II

親善研修生 報告書Ⅱ

日誌・活動記録

香川県立高松高等学校 1年 藤井 咲羽

8月4日(月)

待ちに待ったこの日がやってきた。5時過ぎに家を出て、まだ薄暗く車通りが少ない中、空港へ向かった。集合時間よりも早くついたので、お土産の紹介文を受け取り、それを読みながら二人を待つ。いよいよ出発だという実感が湧いてきて、胸の高鳴りを感じた。そして家族に別れを告げ、これから始まる10日間への少しの緊張と溢れんばかりの期待を胸に飛行機に乗り込んだ。羽田空港では保安検査場が混み合っていたので、念の為先に保安検査と出国審査を行うことにした。手続きを終えると日本最後の昼食としてみんなで日本食を食べた。ダラス空港まで気が遠くなるほどの長さだったが、寝て、映画を見て、三人で映画の話をしているうちに時間はあっという間に過ぎていった。12時間のフライトを終えた私たちは長い列に並び、入国審査を受けた。指紋や顔認証をしていると、だんだん審査官が戸惑った表情に。おかしいなと思っていると「あなたの名前は Sawa、Sawa だよね？」と何度も確認され、奥の部屋に連れていかれた。後になってこのことをホストファミリーや家族に話すと「どうだった？不安だった？」と聞かれたのだが、海外が久しぶりだった私は、全員どこかの部屋で旅の目的などを聞かれると勘違いしていたのだ。しばらくして宇都宮さんと古市くんからメッセージをもらい別室送りだと気が付いたが、頻繁に新しい人が入ってくるので、標本調査かくらいの軽い気持ちでいた。20分程経ち、飛行機の



今からアメリカへ出発



ホストファミリーと一緒に

時間を気にし始めた頃、係の方が「お友達と来ている日本の子だよね？」と言い、パスポートを持って出口を開けてくれた。何もせずに部屋を出たので本当にいいのか少し心配にはなったが、「Have a nice day」といって手荷物受取所まで道案内をしてくれた。無事に入国できて一安心。次の飛行機まで余裕があったので三人で空港を探検した。あちこちに大きなオブジェやカラフルなお店があり、とてもぎわっていた。

タンパ空港に着くとホストファミリーと SPIFFS (セント・ピーターズバーグ国際民族会) の方々が笑顔で出迎えてくれた。シャトルから降りてレイチェルを見つけると、再会に心が躍った。レイチェルはセント・ピーターズバーグ市の親善研修生として1ヶ月ほど前に高松を訪れ、私の家に滞在していた。その時の写真を貼ったボードを作ってくれていて、そこにあった一緒に歌舞伎のパックをした写真を

見て二人で笑った。帰りの車の中では、お父さんとお母さんが窓から見えるフロリダの街を紹介してくれた。レイチェルの家族はお父さんのジェリーとお母さんのジャイヤ、お兄さんのコール、愛犬のルーシーだ。コールは大学生で来週には家に帰ってくるらしい。

夕食はダウンタウンの近くの「Doc ford's」というシーフードのお店に行った。アメリカのメニューは写真がなく、料理の想像がつかなかった私にレイチェルが分かりやすく説明してくれた。私はみんなのおすすめのサンドイッチを頼んだ。グルーパー（フロリダで有名なハタ科の魚）のソテーが入っていて、美味しかったが大きくて少ししか食べられなかった。残りを持ち帰り用のパックに入れ、辺りを散歩することに。レイチェルがこの辺りは海が近くて車も来ないから、散歩やローラースケート、釣りを楽しんでいる人が多いんだよ、と教えてくれた。街中に移動し、ジエラートのお店に連れて行ってくれた。そこでは自由に味見をしてフレーバーを決めることができ、レイチェルはチョコとラズベリー、私はマンゴーとラズベリーにした。路地のいたるところでウォールアートを見かけた。それぞれ違うデザインでバンクシーのように探すのが面白かった。目の前には立派な木が並んでいて、まるで物語の世界に入ったみたいだ。日本との風土の違いを改めて感じた。アメリカの子供たちは小さいときから街中で木登りを楽しんでいるらしい。登った先からはライトアップされた街が一望できてとてもきれいだった。帰って家の紹介をしてもらい、ホストファミリーと会話を楽しんだ後、ふかふかのベッドですぐに眠りについた。



セントピートの絵の前で

8月5日(火)



ダリ美術館にて

今日は7時半に一日がスタート。長旅の疲れも取れ、すっきり目覚めることができた。レイチェルの部屋には写真やこれまで行った国の大壁紙がたくさん飾られていて、見ているだけで楽しくなった。着替えてドアを開けると、ルーシーが走ってきた。お土産のおもちゃをずっと噛んで遊んでいて、気に入ってくれたみたいだ。リビングではホストファザーのジェリーとホストマザーのジャイヤが準備をしていて少し話をしてから仕事にいった。私たちは後からゆっくり朝食を食べて、ダリ美術館へ。私は芸術が好きで美術館をとても楽しみにしていた。入った瞬間から幻想的な建物とお庭が相まって、ダリの醸し出す世界に引き込まれた。中に入ってダリと話せる電話を体験し、ダリが飛び出て見える絵の前で宇都宮さんと一緒に持ち上げられる写真を撮った。レイチェルは何度か行ったことがあるらしく、いくつか解説してくれた。背景や細かい工夫を知れば知るほど違った見方ができる興味深く、間近で見た巨大なスケー

ルかつ細かいトリックアートに夢中になった。

美術館を満喫した後は、ジャイヤの親友バーバラの家のプールで遊んだ。どうやら昨年のハリケーンで屋根が壊れてしまったようだ。これからハリケーンが発達しやすい時期だというが、これ以上各地に被害が広がらないでほしい。しばらくして「隣の家族が子猫のブリーダーをしているよ」といつて連れて行ってくれた。裏庭を通って直接家に入っていったのでびっくりした。オープンで日本よりも近所の人同士の距離の近さを実感した。高松からきていることを伝えると「思いっきり楽しんでいってね」と言ってくれた。中に入るとすぐにドアの向こうから鳴き声が聞こえてきた。そこには6匹の子猫がいて、私たちの脚の上まで一生懸命登ってきて可愛かった。レイチェルは猫アレルギーだがつい触ってしまうらしい。この子たちを見ているとその気持ちはよく分かった。

家に帰るとホールフーズで買ってもらったアメリカのお米にチャレンジ。細長く、そのままではパサパサしていたが、巻き寿司は美味しかった。生のマグロやサーモンが乗っていて日本のお寿司に近い部分があった。

夜は「The Hanger Restaurant」でウェルカムディナーだ。レイチェルが日本にいるときに浴衣をプレゼントしていたので、今日は一緒に着る約束をしていた。気が付くと時間が迫っていて、急ぎ準備に取り掛かった。言葉で伝えるのは難しく、お手本を見せてなんとか英語で説明しながら着せてあげた。会場に着くとSPIFFSの方々が「きれいな浴衣ね」「お揃いの姉妹みたい」と喜んでくれて嬉しくなった。レイチェルも喜んでいて一緒に着られて良かったと思えた。やはりアメリカの人は思つことを直接伝えてくれる。私ももっと素直に口にしていこう。市議会の方もおり、セント・ピーターズバーグ市について教えてくれた。明後日のプレゼンテーションを楽しみにしていると言ってくれて、研修生として今度は私が日本や高松の良さを伝えられるように頑張ろうと自分自身に言い聞かせた。

8月6日(水)

この日はダンカンマクレランギャラリーでガラスづくりをした。工房にはカラフルな作品がいくつも飾られていて、タコやアシカが今にも動きそうなほどリアルだった。説明を受けた後、私たちは二種類のガラスづくりに取り組んだ。一つはシールを張り、周りを削って模様を浮き上がらせるお皿、もう一つはペーパーウェイトだ。私はマナティやイルカのシールを張ったり、青とライムグリーンを混ぜたりと海をテーマに作成した。ペーパーウェイト作りでは何度も何度も熱して形を整えた。色ガラスをつける量が少なかったのかライ



私たち研修生 6人



ガラス作り

ムグリーンが薄くなってしまったのが残念だが、スタッフの方に手伝ってもらいきれいに仕上がった。最後に立体的な模様の花瓶を作る様子を見せてくれた。素早い動作で上手く形作っているのを実際に見えて面白かった。折り重ねた新聞紙で、熱したガラスを直接触って形を整えていたのには驚いた。

SPIFFS のジョーエレンさんが買ってくれたサンドイッチを食べた後、着替えてフロリダクラフトアートというところに向かった。今から私たちはそこの一角で日本文化のデモンストレーションをするのだ。会場につくとお客様が待っていた。昨年の研修生のリレンも来てくれていた。始まるまでのんびり話していると SPIFFS のスティーブンさんにお花を生けてほしいと頼まれた。小学生の時に学校のクラブで軽くやったきりで自信はなかったが、来てくれた方に喜んでもらえるよう引き受けたことにした。かごや花瓶が小さくバランスをとるのが難しかったが、立体的に生けられたと思う。そばには高松のマップが置いてあり、それを見た方が話しかけてくれた。どうやら何年か前に ALT として高松に来ていたらしい。今と昔の高松の話で会話を弾んだ。宇都宮さんの茶道から始まり、私は古市くんと書道を紹介した。説明をして実際に体験してもらったり、みんなの名前を漢字で書いて披露したりした。漢字の形や意味に興味を持ってくれて、名前を当て字で書くと、これはどういう意味? と質問攻めにあった。スティーブンさんは日本のことにとっても詳しく最後にプラスで説明してくれた

のだが、私の知らなかつたことも多かった。どの質問も核心を突いたものばかりで、必死に考えて自分なりの答えを導き出さなければならなかつた。それだけ興味を持ってくれて嬉しかつたが、日本の文化を紹介するためにはもっと深い知識を身につけておかなくてはいけないと感じた。



美しい夕焼け空とともに

激しい雷とともに降っていたスコールもすぐに収まり、メキシカンタコスを食べてセント・ピートビーチアクセスに向かつた。チキン、玉ねぎ、青じそが入っていてソースも勧められたが、あまりに辛く私は入れられなかつた。適度に波があつて空と水平線とがどこまでも続いていく景色は瀬戸内海とはまた違つた美しさだった。サーフボードで大きい波に乗れたと思って油断していると思いつきり海水を飲み込んでしまい、ヒリヒリして痛かつた。私は泳ぎが得意とは言えないため、突然水位が上がつたのに対応しきれず必死にもがいて岸に向かっていると、みんなに笑われて少し恥ずかしかつた。アメリカの国旗のタオルやズボンを持っている人を見かけた。家の外に旗を飾つている人もいて、愛国心が強いなとつくづく思う。八時を過ぎてもまだ明るく、きれいな夕日を眺めることができた。

8月7日(木)

起きるとジェリーとジャイヤがウベ(紫山芋)のパンケーキとオムレツを作ってくれた。今日はプレゼンテーションの日だ。車の中で事前に質問を予想しているうちに、もう市役所の目の前まで来ていた。入り口に荷物検査と金属探知機のゲートがあり、厳重な警備がなされていた。立派な会議室に入るとガベルが叩かれて本格的な議会が始まったのでとても驚いた。厳かな雰囲気の中でオープンフォーラムから始まり、私たち研修生六人が紹介された。次はいよいよ私たちの番だ。直前になる



市議会でプレゼンテーション中

と不思議と緊張していなかった。私は高松市の伝統工芸品、讃岐かがりてまりを紹介した。私の手作りの作品を実際に見せながらクイズを出すと、盛り上がって積極的に答えてくれたので、私も楽しい気持ちになった。議会の都合で質問の時間がなく、あっという間に終了した。席に着くとジェレッドとレイチェルが「Great job」と言ってくれた。「興味深かったわ」と温かい言葉をかけてくれた方もおり、無事に終わって本当に良かった。自分の中でも満足の出来だった。市長室には各地のお土産が所狭しと並んでいて、ウェルチ市長が「これが手鞠だよね」と嬉しそうに見せてくださった。お土産の菓子器の説明をした際も「これ気に入ったよ」と笑顔で聞いてくださる優しくて気さくな方だった。戻ると先程話しかけてくれた方々が待ってくれていた。もう少し話したかったなと思っていたところだったので

ても嬉しかった。その中にはなんと私の通っている高校に以前 ALT として来ていたという夫妻もいたのだ。他にも「来月高松に行く予定なの」「日本は本当にいいところだったわ」と言ってくださった方がいて、セント・ピーターズバーグ市と高松市の積極的な交流が育まれていることを感じた。思いかけず多くの人が日本に興味を持ってくれていると知り、今後も外国の方に日本のことを見たいと思った。

肩の荷が下りてビスケットやトマトのフライ、パプリカのジャムなどアメリカならではのものを味わったら、ジェリーとジャイヤは仕事へ。ジェリーは高校、ジャイヤは小学校の先生で朝が早く忙しそうだ。そんな中合間を縫って私の発表を聞きにきてくれ、そのうえ「最高だったよ」とたくさん褒めてくれて感謝しかない。

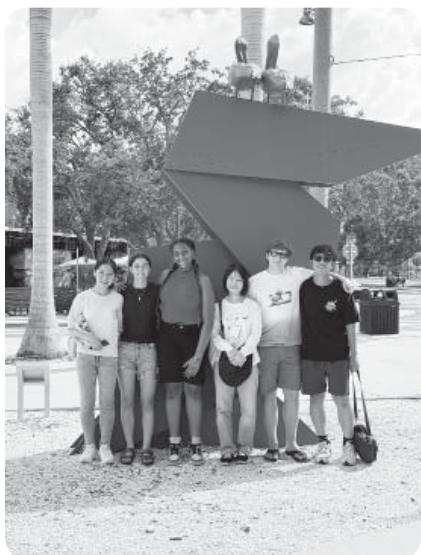
レイチェルがアルバイトをしている洋服店に寄り、午後からはキューティーブロンドという映画を見た。一度見たことがあったので、英語の表現の仕方を学べて面白かった。ジェリーが友人と脚本を書いたというハリウッド映画「IDENTITY THIEF」を紹介してもらったが、日本では上演されていないそうだ。残念だがいつか観られたらなと思う。お気に入りのシーンの話で盛り上がっていると古市くんとジェレッドが遊びにきた。レイチェルの車でドライブをして、一緒にプールに入った。年の近いレイチェルやジェレッドが慣れた手つきで運転しているのは不思議な感じだった。たまに激しい運転をしている人がいて、乗っている方はドキドキだった。また多くの家にはプールがあるそうだ。レイチェルの家のプールは約 1.8 m と深くて足がつかなかったが、水をかけあって楽しい時間を過ごした。そして今度はジェレッドの家でバーベキューだ。新聞紙を敷いたテーブルの上に直に大量のジャガイモやエビを置いて衝撃を受けたが、周りを見ても誰も気にしておらず、これがアメリカのスタイルなんだと受け入れることにした。さらに衝撃だったのは緑茶が甘かったことだ。緑茶とは思えずすぐにお水に変えた。SPIFFS のザックさんと話していると何年か前の研修生だと教えてくれた。当時の高松からの研修生とよく連絡を取り合っていると聞き、



ウェルチ市長と一緒に

今なお繋がっていること、経験をこうして私たちに語ってくれることは本当に素敵だと思った。また、私は小さい頃からクラシックバレエを習っていて昨日私が踊っている動画を家族に見せたのだが、それをジャイヤがスティーブンさんに綺麗だったと紹介しているのを聞いた。照れ臭かったが嬉しかった。突然雨が降り出たのでプールパーティーを変更し映画を見たが、大まかな流れしか話の内容を掴めなかった。みんながノリノリで踊っていて面白そうなストーリーだったので、日本に帰ったらもう一度見ようと思う。

8月8日(金)



ペリカンと私たち

目が覚めるとすでに10時だった。慌てて起きたが誰もいなかつた。着替えていると何だか身体が熱く、嫌な予感がした。体温計で測ると疲れが出たのか微熱があった。用意してくれていたシリアルを少し食べ、お薬を飲んだ。そして熱が下がるよう願って寝ることにした。一時間後、タイマーの音にびっくりして飛び起きると、思いが通じたのか汗だくですっかり元気になっていた。どうしてもみんなと行きたいという気持ちが治したかも知れない。レイチェルが、一緒に映画を見ようと思ったのに私が寝ていて寂しかったと言っていて、申し訳なく思った。昼からはボーリングに行った。アメリカでは学校の遠足でボーリングに行くことがあるらしい。今日も小学生らしきグループをいくつか見かけた。機械に登録した宇都宮さんの顔写真に私とジェイダが幽霊のように映っていて、ジェイダと思わず吹き出

して笑った。だんだんコツを掴んできて、ストライクやスペアをとったときは大喜びでみんなとハイタッチをした。レイチェルがとても強くて何度もストライクをとっていた。この後はイルカを見に行く予定だ。途中でハンバーガーのお店に寄ったがお腹がすいていなかったので、ジャイヤが小さめのチキンを買ってってくれて、セントピートピアへ向かった。

船に乗るとタンパには山がないからか、向こう岸の建物と空がはっきりと見えた。穏やかな風が吹いていて気持ちよかつた。開けたところに出るとすぐに何組もの親子のイルカに遭遇した。船をイルカの近くに止めてくれて真横で見ることができた。しかも群れのイルカが次々にジャンプしてくれて、その迫力に圧倒された。ジェレッドのお父さんのジェイミーに高松で野生のイルカを見るか聞かれ、野生はおらずこんなに近くで見たのは初めてだと答えた。その代わりイルカと一緒に泳げる施設があることを伝えるとジェレッドの妹のローランも行ってみたいと言っていた。

家に帰ってジェリーにたくさんのイルカが見えたと伝えると、なかなか見えないからラッキーだったねと喜んでくれた。一応、



みんなとピザ作り

今朝微熱があったが今はもう元気だということを二人に伝えた。すると定期的に心配して声をかけてくれた。本当に優しい家族だ。

今夜は家にみんなを招いてお泊り会をするので、部屋を片付けた。全員がそろうのを待っていると大粒の雨が降ってきた。前の道路が川になっていて、ジェレッドが様子を見に行くと膝下まで水があつたらしい。こんな雨はめったにないとみんな驚いて出てきた。レイチェルのおじいちゃんやおばあちゃん、ジャイヤの親友バーバラと旦那さんのケビン、近所の友達も集まって家の中が一気にぎやかになった。みんなフレンドリーで次々に話しかけてくれてとても楽しかった。古市くんがベッドで寝ていて、ジェレッドの提案で隠し撮りをすることに。私たちがそばで話していても気づかず、笑いをこらえるのに必死だった。

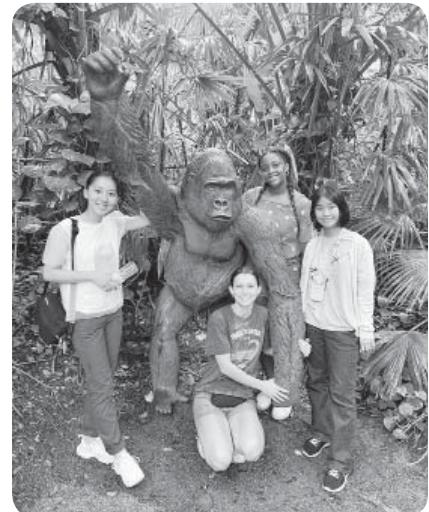
ピザを作り、グーニーズという映画を見て楽しんだ。ジェレッドたちが帰ると、宇都宮さんもソファーで寝ていたのでレイチェルとジェイダと三人でお庭のシーソーで遊ぶことにした。真夜中に懐中電灯を持ちながらするシーソーは興奮が止まらなかった。家に戻ると今度は一つのベッドに集まって話した。つい止まらなくなってしまい、気が付くと1時を回ろうとしていた。私は明日も早いのでお風呂に入ってそろそろ寝ることにした。後から聞くとレイチェルとジェイダは1時半まで話していたらしい。思う存分楽しい夜を満喫した。



コールのベッドに集合

8月9日(土)

興奮覚めやらぬまま研修生6人そろって朝ごはん。昨日夜ふかししたが特に眠気は感じなかった。今日は楽しみにしていたブッシュガーデンに行く日だからだ。ブッシュガーデンというと、たいていは動物の保護を目的とした動物園のようなものを指すらしい。タンパにあるのはアトラクションのエリアが動物のゾーンに挟まれて、自然と調和したものになっていた。エジプトやモロッコなど、アジアやアフリカ各国のエリアに分かれしており、ライオンやチーターのほか、フラミンゴやアリゲーターも見ることができた。レイチェル、ジェイダ、ジェレッドは私と同じくジェットコースターが大好きで、たくさん連れて行ってくれた。あるジェットコースターを待っていると三度もレンの異常で止まってしまった。こんなに頻繁に問題が起こって大丈夫なのかと心配になったが、これに限っては理由もわからずよく止まってしまうから問題ないと言っていた。再開のアナウンスが聞こえると、拍手が沸き起った。待っているだけで周囲の人と一緒に感を感じさせる様子に驚いた。全部で四種類のジェットコースターに乗ったのだが、スピード、高低差、回転力のどれをとっても日本と全くレベルが違った。順番を待っているときは想像して怖かったが、いざ出発するとなんとも言えない高揚感がたまらなく楽しかった。私は高さと回転力のある



ゴリラの像と



ジェットコースター前で

ジェットコースターが一番好きだった。

お昼にはプレッツェルを食べた。やはりアメリカサイズで、ジャイヤとレイチェルと三人で二つをシェアしてちょうどよかったです。少しショッパかったが周りの塩を外すとカリカリしていて美味しかった。宇都宮さんが頭が痛いと言いだし心配だったが、休むと少し元気そうになってほっとした。私は今日ロイヤルブルーのズボンを履いていたので、ジャイヤに良い目印になると言われた。アメリカではピンクのTシャツなど鮮やかな洋服を着ている人が日本よりも多い中、絶妙に目立つ色だったのだろう。さっき吉市くんにも言われたところだった。

最後に円形のボートで川下りをする日本では珍しいアトラクションに乗った。勢いよく下ったり、滝の中を通ったりとスリルがあり面白かった。同じボートに乗った人が友達同士のように親しく話していた。初めての人にも躊躇せず話しかけるところが陽気で積極的なアメリカ人の良さだと思う。たわいもない話で盛り上がり、水がかかると一緒に笑った。だからこそより一層楽しかった。出口のそばには大型の乾燥機があってびしょびしょになった髪や洋服を乾かした。便利でぜひ日本のテーマパークにも設置してほしいものだ。

家に帰るとジェリーがシーフードのソテーとサラダを作ってくれていた。料理が好きなジェリーは「もっと家で作ってあげられる時間があったらよかったのに」と言っていた。そして私が持ってきたうどんを家族に振る舞った。ジェリーの提案でみんなでお箸を使って食べた。以前練習していたらしく、みんな上手に使って食べて驚いた。私がびっくりしているのを見て嬉しそうだった。

8月10日(日)

早起きしたので、友達や家族に連絡をした。朝はダンキンドーナツに連れて行ってくれた。昔は日米どちらにもダンキンドーナツとミスタードーナツがあったそうだ。私はブルーベリーのドーナツを選んで車の中で食べた。ミスタードーナツに似ていたが、他にサンドイッチやベーグル、ハッシュポテトも売られていて種類が豊富だった。車の中では私たちの好きなハイスクール・ミュージカルなどディズニーの曲をかけてノリノリで歌いながら向かった。地図ではあまり遠くには見えなかつたが二時間もかかり、アメリカがいかに広いかを思い知らされた。今から行くレインボーリバーは、レインボースプリングスという大きな源泉の一つの9km程の淡水の河川だ。そこではカヌーやシュノーケルといったアクティビティを楽しむことができる。私たちはチューブという大型の浮き輪に乗って泳いだ。川はとても透き通っていて魚がはっきり見えた。入った瞬間あまりの冷たさに震え上がって叫んでしまった。水温は22度だそう。水は冷たいけど外が暑



澄み切ったきれいな景色



お好み焼きを作り中

たが頼む気にはなれなかった。

いから気持ちよく感じるよ、と聞いていたのだが違った。あいにく今日は夕方から雨の予報で、曇っていて外が涼しかったのだ。しかしホストファミリーは寒がってはおらず、アメリカの人は寒さに相当強いのだなと思った。それでも数分入っていると慣れてきて足から少しづつ水につかれるようになった。泳ぐのは楽しく、最後は聞いていたように気持ちよく感じたほどだ。楽しんだ後は「Blue Gator」にアリゲーターを食べに行った。一口サイズのフライが出てきて、鶏肉みたいだった。味も似ており、あっさりしていておいしかった。カエルもあるよ、といたずらで進められて

午後からは地元に根付いた3つのスーパー・マーケットを巡ってお土産を買った。Trader Joe'sはオリジナル商品が多く、Publixはお菓子や日用品の種類が豊富だった。試食で周りにキャンディーのついたソフトクッキーをもらった。Targetはおもちゃや衣服も売っていてスーパー・マーケットとショッピングモールの中間のような感じだ。どれも一階建てとは思えないほど広くて立派だった。だが最近はハリケーンの被害を防ぐために二階建てが増えているらしい。雨が降り出し、必要な食材を買って急いで家に帰った。毎日のように午後から雨が降っている。家が雨漏りしたのを見てもやはり今年は雨の量が尋常ではないみたいだ。レイチェルと今は高松の方がサンシャインシティみたいだよねと言って笑った。

レイチェルのボーイフレンドが遊びにきて、デニムの飾りつけをしていた。レイチェル達は明日から新学年だ。高校最後の年、女子は全員初日に卒業年をデコレーションしたデニムを履いていくそうだ。前日はお祝いのパーティーをする家も多いという。アメリカの進級は日本よりも特別感があって、楽しそうで少し羨ましかった。夜はパーティーの代わりとはいかないが、みんなにお好み焼きを振る舞った。キャベツを切っていると真横でマントをつけたスーパー・ドッグ、ルーシーが狙っていた。チーズと人参とキャベツが大好物なんだそう。とても人懐っこく、残った芯をあげるとしっぽを振って寄ってきた。アメリカには薄切りのお肉は売っておらずシーフードとベーコンで代用した。すでに日本食が恋しかったのでいつもより美味しく感じた。ソースが好評で、みんな美味しいと言って何枚も食べてくれた。いつか日本で他にも美味しい日本食を家族に紹介したい。

8月11日(月)

朝食を食べているとお兄さんのコールが起きてきた。昨日の夜遅くに帰ってきたらしい。今朝のメニューはベーグルとベリーを乗せたヨーグルトだ。アメリカのベリーは日本の1.5倍の大きさはあった。レイチェルも学校に行って一人だったので、支度をした後ルーシーと戯れた。一緒におもちゃで遊んでいると、家の前を散歩していた犬に怯え、近寄ってきた。なでてあげる



お店の看板の前で



お揃いのTシャツを着て

と気持ちよさそうに寝始めてとても可愛かった。

お昼前にスティーブンさんが迎えにきてくれてショッピングを楽しんだ。最初は観光客向けのお土産店だ。セント・ピーターズバーグ市で有名なペリカンやマナティのグッズがたくさんあった。斬新なアイデアのものが多く、スマートフォンをかざすと動くポストカードが面白かったので家族や友達にいくつか買うこととした。初日にダウンタウンで見たウォールアートのカードを見つけ、気分が上がった。その後インターナショナルショッピングモールへ。規模が大きく二階建てとは思えないほどの数のお店が立ち並んでいた。ブランド物の衣服店ばかりで私が買えそうなものはなかったが、キッチンカーで眼鏡やお菓子を売っている人もいて、それ違うと声をかけてくれた。フロリダのおす

すめをいくつか教えてくれたので、次の機会に行ってみようと思う。空港の近くでホテルもついていて、ここだけで完結できそうなほど充実していた。帰りの車の中でスティーブンさんにいつから英語を習っているの?と聞かれ、幼稚園生のころからだと答えた。すると英語もその発音も上手だね、と褒めてくれて嬉しかった。まだ言いたいことを上手く伝えきれていないが、自分の中で自信につながった。スティーブンさんは家で意識的に日本語を使うようにして日本語を身につけたらしい。とにかく触れることが大事だと教えてもらったので、これからも積極的に周りの人と話していくこうと思う。

お別れパーティーにはピアでレイチェルとお揃いで買ったTシャツに、ジェレッドのお父さんのジェイミーにもらったレイズの帽子で行った。残りの日が少なくなっていると思うと寂しく、この楽しい時間がずっと続けばいいのに強く思った。夜はコールとジュラシックパークを見て、家族で学校の話をした。私の学校の一日を紹介すると掃除の時間があることや放課後も塾で勉強していること、ジェリーとレイチェルのように親子が先生と生徒として同じ学校に行くことはできないということにとても驚いていた。先生が移動して授業をする形式には興味があったそうだ。明日は二人の行くオセオラファンダメンタル高校に行くことができる。どんな新しい発見があるか今から楽しみだ。

8月12日(火)

今日は朝食にシリアルを食べて、6時半に家を出た。アメリカの高校生は早起きだ。なぜなら、ほとんどの学校が7時半には始まり、しかも遠くからきている子が多いからだ。レイチェルも6時前に起きて車で1時間近くかけて通っていた。自分で運転していくときもあるが普段はお父さんと一緒に往復しているらしい。一時間目は経済学だ。校舎とは別に外にコテージのようなものが並んでいて、そこで授業だった。生徒たちは筆箱を持たず、リュックの中にペン一本と電卓を携帯していた。景気やGDP、お金についての調べ学習で、



高校に体験入学

私は日本の経済に詳しくないが、アメリカでは日頃から自国の経済について学ぶ時間があることに驚いた。この後は物理、数学、国語、プレゼンテーションの授業だ。私たちが先生の待つクラスに行くため校舎の外と中を行き来しなければならないが、休み時間が5分しかないので大変だ。移動中にレイチェルが何人かの先生を紹介してくれた。インターナショナルスクールだけあって生徒も先生も国際色豊かだ。日本語で話してくれた先生もいた。そういうしているうちにまだ教室についていないのにチャイムが鳴ってしまった。私は焦っていたが、すれ違った多くの生徒に急ぐ様子はなかった。ルールは先生ごとに違うが、多くは生徒に委ねられている。時間にも厳しくはなさそうだ。教科書は借りているらしく、普段は置いて帰っているという。私はどうしても毎日荷物が重くなってしまうのでとてもうらやましかった。どのクラスも先生の話は早くて少ししか聞き取れず、プリントを見て内容を掴むのに必死だった。板書よりも自由な話し合いの時間が多く、皆自分の意見をはっきりと持っているので活発的な授業になっていた。5限目が終わるとランチタイムだ。ジェリーの部屋に荷物を置かせてもらっていたのだが、そこには冷蔵庫も電子レンジもあった。レイチェルもよく使っているみたいだ。クラスルームがないのでそれぞれが好きなところで食べていた。私たちは中庭でピーナッツバター＆ジャムのサンドイッチを食べ、たくさん持ってきていた日本のお菓子をお友達に配った。マスカットのグミと和三盆が人気だった。スペイン語と化学の授業の後、校長先生に挨拶に行った。学校のオリジナルグッズがたくさんあって、Tシャツやスウェットなどをもらった。お土産の説明も無事終わり、疲れ果ててウトウトしながら帰った。

最後にレイチェルの家に集合し、書道をした。私たちは10日間のお礼としてジョーエレンさんに名前を漢字で書いた色紙をプレゼントすることにした。サプライズをとても喜んでくれた。みんなで案を出し合って決めた漢字に興味を持ってくれて嬉しかった。解散後に私が筆で書いた家族みんなの名前の色紙をプレゼントすると、喜んで家族写真の横に飾っていた。ジェリーとジャイヤはスターバックスのタンブラーとマグカップをプレゼントしてくれた。フロリダとタンパの絵が描かれたオリジナルボトルだ。そこにはまだ知らない食べ物や名所も乗っていて、「また来ないとね。今度挑戦してみて」と言ってくれた。おじいちゃんやおばあちゃんも来てくれて、とうとう最後のディナーだ。



ジョーエレンさんと一緒に



最後のディナー

アメリカンタコス、ステーキ、エビ、サラダを食べた。アボカドの入った私の大好物のワカモレをたくさん食べることができた。作り方のコツを教えてもらったので日本でも作ってみたい。9日間の思い出を詰め込んだパッキングを終え、一緒にケーキを食べて最後の夜を過ごした。もっともっと話していたかったが、明日もみんな学校や仕事があるので早めに寝た。

8月13日(水)

家を5時15分に出るので4時半に起きて、レイチェルと一緒にペットのレオパード・ゲッコウという種のヤモリに餌をあげた。もうすぐ家族や友達に会えるのは楽しみだったが、帰らずにずっとここにいたい気分だった。毎日が充実していてとても短く感じた。忘れ物がないか最終確認をしていると、ジャイヤが来て色紙を渡してくれた。「これからもレイチェルの妹だよ」「いつでも帰ってきてね」というみんなのメッセージが詰まっていて感動した。最高の家族に出会えた私は本当に幸せだ。

タンパ空港ではまずスティーブンさんに名前の色紙をプレゼントした。そしてホストファミリー達とハグをして、別れを惜しんだ。ジャイヤやレイチェルは泣いていて私も本当に寂しかった。いつか必ず戻ってくると伝え、これからも連絡を取り合おうと笑顔で約束して、シャトルに乗るまで手を振り続けた。第二の故郷で過ごした濃い日々はいつまでも特別な思い出になるだろう。セント・ピーターズバーグは本当に素晴らしいところだった。ダラス空港に着くと数えきれない程のメッセージが来ていた。帰りは私たち三人だけだったので乗り継ぎを心配してくれていたのだ。無事到着したことをホストファミリーに伝え、お世話になった人に感謝のメッセージを送った。「チャレンジャーなあなたに会えて幸運だった」と言ってくれて、優しくて素敵な方たちと会えたことは私のかけがえのない宝物だ。この10日間、貴重な経験をたくさんさせてもらった。みんなとの日々がありありと蘇ってきて早くも戻りたい気持ちだった。



ルーシーとお別れ

8月14日(木)

時差ボケもあり寝ても寝ても眠く、目が覚めるとすでに日本の上空だった。日本に着くと日本語の掲示板やアナウンスに安心した。家族や国際交流協会の方が迎えに来てくれていて、安堵と研修を成し遂げたことへの達成感が大きかった。日本を離れて異文化に触れたことで、アメリカの良さはもちろん日本の良さをたくさん感じた。お世話になった方に次会ったときには成長した姿を見せられるよう、この研修をきっかけとして積極的に国際交流に励んでいきたい。

感想文



かけがえのない経験

香川県立高松高等学校 1年

藤井 咲羽

アメリカでの10日間はたくさんの人にお会い、学びと気づきの毎日でした。初めての経験ばかりで戸惑いや苦労もあったけれど、それ以上に新しい環境での生活は私を大きく成長させてくれるものでした。

特にコミュニケーションを通して多様な考え方や価値観に触れ、視野が広がりました。現地の方はフレンドリーでどこに行っても話しかけてくれました。私が姉妹都市の高松市からきていることを伝えると、數えきれないほど歓迎の言葉をもらいました。アメリカの方々の素敵なところは自分の思いを直接相手に伝えるところです。滞在中、何気ない会話の中で感謝の言葉や相手を褒める言葉を何度も耳にしました。私も自分の思いや考えを積極的に伝えようとすると、伝えきれなくてもその気持ちを受け取ってくれました。拙い英語を最後まで真剣に聞いてくださり、時間を忘れて夢中になるほど会話を楽しむことができました。

異文化に触れたからこそ再発見できた日本の素晴らしさも沢山あります。「日本人は親切で礼儀正しいよね」とレイチェルがあるとき私に言いました。外国の方は日本を高く評価し、興味を持ってくれていて「日本は本当に良い国だった」「一度行ってみたいんだ」と言ってくださる方多くいました。驚きと同時に自国の良さを再認識し、誇らしい気持ちでした。日本では当たり前のように感じてしまうときもあるけれど、相手のことを考えた細やかな心遣いができるところは私たちが自信を持っていいところだと思います。

この研修で得た経験は一生の思い出です。私を家族の一員としてあたたかく迎え入れてくれたホストファミリーのおかげで、充実した日々を送ることができました。時には私の英語力不足で伝えたいことや感謝を上手く表現できない悔しさも感じました。この気持ちを力に変え、これから英語力を磨いていきます。そしていつか必ずセント・ピーターズバーグを訪れようと決心しました。次に会った時には成長した姿を見せられるように積極的に活動に参加し、自分なりの努力を重ねていきたいと思います。

最後に、共にかけがえのない経験をした研修生の仲間、協力してくれた家族、貴重な経験の場を作ってくださった高松市国際交流協会の方々、この研修に携わってくださった全ての方々に心から感謝しています。本当にありがとうございました。

親善研修生 報告書 III

日誌・活動記録

香川県立高松高等学校 1年 古市 隼翔

8月4日(月)

今日はついに待ちに待った出発の日。前日に野球の練習があったり、友達と遊びに行ったりして疲れているはずなのになかなか寝付けなかった。不安や緊張は一切なく、期待と興奮で胸がいっぱいだった。高松空港に着いてチケットを発行したりスーツケースを預けたりしてすぐに保安検査場へ向かった。そこで集合写真を撮ってから最後の別れをした。

そこから羽田空港について、出国審査や保安検査場を通り、最後の日本食にそばと天ぷらの定食を食べた。その後機内で機内食を食べたり、機内のビデオを見たり、Netflixをみたりしていた。機内食のレベルの高さに驚いた。

ダラス国際空港に着いて入国審査を通った。その時に、アメリカとカナダは優先レーンになっていて、「日本も同盟組んでいるのに優先にならないのだな」と思った。待ち時間が30分くらいあり、同じ研修生の宇都宮さんと藤井さんが通のを待っていたが、藤井さんが別の部屋に連れていかれていて、どこが怪しかったのだろうと困惑した。

そして、自分の番になったが、受け答えもしっかりでき、最後には楽しんできてね！と言ってくれた。藤井さんが出てくるのが遅くみんなで心配していたが、帰ってきたらなんともなさそうな感じでむしろ別室が気になってしまった。

ターミナル移動のモノレールに乗り、保安検査場を通過したが、その時の従業員の人たちが通っていく人にはすごく不愛想だったのに、お昼休憩の時間になった瞬間に従業員たちだけで大はしゃぎしていて、「仕事とプライベートの切り替えがすごいな」と思った。その後、飛行機の時間までに余裕があったので、アメリカのスター・バックスにみんなで寄った。そこで、アメリカ限定のマンゴー・ドラゴンフルーツ・リフレッシャーを飲んだ。さっぱりしたドリンクでマンゴーよりドラゴンフルーツの味が強かったが、とてもおいしかった。

その後、アメリカの国内線に乗り換えて5時間のフライト。機内はとても寒く揺れていたが、着陸はすごくうまかった。元々軍で働いていた人がパイロットになることも少なくないらしく、乗った飛行機のパイロットも軍人だったのかなと思った。ついにフロリダに到着。空港に着くとSPIFFS（セント・ピーターズバーグ国際民族会）のジョーエレンさんとスティーブンさんや、藤井さんのホストファミリーのレイチェルの家族や宇都宮さんのホストファミリーのジェイダの家族、そして僕を受け入れてくれるジェレッドの家族たちが横断幕をもって迎えてくれた。

ジェレッドの家族は父のジェレミーさんと母のジェニファーさんと長男のジェレッドと次女のロー



機内から見たアメリカの様子

ラン、そして犬のゾウイの5人家族だ。空港からそのままジェレッド達の家に行った。アメリカの道路は右車線だったなと思いながら、途中で大きな橋を渡った。セント・ピーターズバーグ市に繋がる橋は3本もあるらしく、どれもとても大きいものだ。四国から本州に渡るためのものと変わらないのかなと思いつつ、車で景色を眺めていた。家に着くと、自分の部屋と家の中でのルールやどこに何があるかなどの説明

をしてもらい、持ってきた日本のお土産を紹介しながら、日本から持ってきたお菓子と一緒に食べたりトルティーヤチップスを食べたり、楽しいひとときを過ごした。ハッピーターンや柿の種などのせんべい系のものが人気だった。柿の種はワサビ味を紹介したが、辛さが好きなのだろう。

夕食にはおじいちゃんとおばあちゃんも一緒に本場のタコスをいただいた。トルティーヤにチキンを専用の調理器具で煮て、裂いたものやチーズ、アボカド、トマト最後にチーズソースをのせて食べた。さらに、「謎の豆と白ご飯」という、初めて見るキューバの料理も登場。意外な組み合わせだったが、これも旅ならではの面白い体験。タコスは超ボリューム満点でキューバ料理もおいしくいただけた。お米が全く日本と違い、パラパラしていて食感にどうしても違和感があったが、日本のものとは違うおいしさがあった。

夜はローレンとジェレッドが通っているスイミングクラブを見学した。かなりハードな練習が繰り広げられていて、アメリカの部活動の厳しさに驚かされた。

日本の部活動よりももっと緩いのかなと思っていたけれど、想像の倍きつそうだった。



ジェレッドとローランの出迎え

8月5日(火)

朝ごはんは、ジャムトーストとヨーグルト。特にジャムが絶品で、実は知り合いが作ったものだと聞いて驚いた。ヨーグルトはマンゴーのものを食べたが、底に果肉が入っていて、濃厚でおいしかった。

予定していたガラス体験が延期になったため、急遽ダリミュージアムへ行くことになった。途中で、屋根のないトロピカーナフィールドを訪れ、記念写真を撮影。今はこのトロピカーナフィールドの代わりにヤンキースがキャンプとして使っている球場が使われているそう。ハリケーンのせいで屋根が飛ばされていて本来の姿ではないが、開放感が印象的だった。

ダリミュージアムでは、幻想的で不思議



屋根のないトロピカーナフィールド

なアートの世界に没入。作品一つ一つに込められた想像力に感動した。特にリンカーン大統領の作品が気に入った。近くで見ると女性が外の風景を見ている絵なのに遠くから見るとリンカーン大統領の肖像画に見えるのだ。

人間の特長を上手く使った絵で見とれてしまった。作品だけでなく、美術館の建物の外見がとてもキレイな作りだった。



Culver's のバターバーガー

昼食は「Culver's」でバターバーガー。肉厚のパティにふわふわのバンズ、さらにポテトをランチソースにディップするのが最高だった。パティが特に肉肉しい感じでアメリカ感満載だった。ランチソースはシーザードレッシングに似ていてコクが強くアメリカでは毎食使っていたのではないかというくらいお世話になった。

午後は「ターゲット」や「ホールフーズ」でお土産探し。家族の好きなメジャーリーグのトレーディングカードやレイズのポテトチップス、さらにはいろんな種類のチョコレートを大量に購入した。その後は近くの公園でジェレッドとポケモンGOをした。

ジェレッドがアメリカ限定のポケモンを捕まえてくれた。日本のゲームで仲が深まるのがとても嬉しかった。その後疲れていたこと也有って少し昼寝をした。

夜はウエルカムディナーが開催され、ジョーエレンさんやスティーブンさんが働いているSPIFFSの人たちやセント・ピーターズバーグ市の職員の方や、藤井さんと宇都宮さんとそのホストファミリー達とご飯を食べた。サラダに初めからドレッシングがかけられていて、野菜じゃなくてドレッシングを食べたいのかと思うくらいにかけられて驚いた。自分はいつもサラダにドレッシングをかけないこともあり、食べるのに抵抗があったが、ランチソースがかかっていて今まで食べたサラダの中で一番おいしかった。他にも照り焼きチキンがあったが、日本のものとは全く違っていて、照り焼きよりもバーベキューソース感が強かった。最後にいただいたアップルパイがとても美味しかった。アップルパイはジョーエレンさんの手作りらしく、生地のサクサクと甘いトロつとしたリンゴがマッチして最高だった。ジェレッドとローランが日本のアニメが大好きなこともあり、アニメの話題が多くなった。たまたま旅行前に鬼滅の刃の映画を友だちと見に行って、その話題で盛り上がった。他にも僕の知らないようなアニメをジェレッド達が知っていて、日本の文化が世界に広がっていることが誇らしかった。

8月6日(水)

午前中は延期されていたダンカンマクレランギャラリーでガラス体験をしに行った。お皿にシールでデザインを施したり、ガラスの飾りを作ったりと、手を動かしながらアートに触れる時間。熱いちは、はちみつのように柔らかく、冷えると一気に固まる不思議さに魅了された。いつも使っている固いガラスがこんなに解けるのだと学びになった。

昼食は「Publix」のサンドイッチ。ローストビーフを選んでみたが、これがまたジューシーで美味

しかった。しかし、トッピングされている具材を見ると、書ききれないほどのものがあり、重量感がすごかつた。食べるのが何とかだったが、今までのサンドイッチ以上においしかった。

午後は日本文化を紹介する茶道・書道教室を開催した。参加者たちが茶道、書道の作法であったり、道具であったりに興味津々で、しっかりとした知識を持っていたのが印象的だった。お茶の試飲をしたり、漢字の紹介をしたり、英語の名前を漢字の当て字にして、書いたりした。また、漢字には意味があることや同じ読みでも違う漢字がたくさんあること、またその漢字をすべて書き順も覚えなければいけないことに驚いていた。文字にもいろんな種類があるので改めて気づかされた。



ガラス体験の様子



タンパベイときれいな夕日

その後はセント・ピートビーチアクセスへ。チキンを食べたり、海で泳いだりして、アメリカの自然と交流を楽しんだ。「Publix」のフライドチキンが柔らかく、味付けもスパイシーでとてもおいしかった。海も瀬戸内海と違い、そんなにしょっぱいと感じなかった。また波が穏やかで、深さは浅いものの、海岸の水位は高く感じた。浮かんでいるだけでも何度も波に飲み込まれ、レイチェルや藤井さんに笑われた。

8月7日(木)

この日は市議会での高松市紹介のプレゼンテーションに挑戦。アメリカ国旗の掲揚も見学でき、厳かな雰囲気の中での発表。ジョークも交えた瀬戸内国際芸術祭についてプレゼンテーションはうまくいった。アートと瀬戸内海の島々の暮らしの関わりについて興味を持ってくださった。仕事のある中で、プレゼンテーションを見に来てくれたホストファミリーにも褒めてもらえた。セント・ピーターズバーグ市もアートにゆかりのある都市だからか、とても興味を持って聞いてくださった。市議会議員の人がいいアイデアがたくさんあったと言ってくれたので、準備してよかったです。

市長のウェルチさんとも面会し、讃岐一刀彫の手のひらだるまのお土産を渡し、写真も撮影した。貴重な思い出となった。ウェルチさんも高松市との交流をすごく大切にしてくださっていて、今までのお土産もコレクションとして飾ってくれていた。

昼食は、伝統的なビスケットのお店へ。ふわふわのビスケットは絶品。いろんなソースにディップして食べた。パプリカのソースもおいしかった。熟する前のトマトのフライが癖がなくておいしかった。調理したトマトには苦手意識があったのだが、外がカリッと中がトロッとしていて最高だった。

午後はレイチェルの家でプール遊び。すごく深くてびっくりした。そこでレイチェルの犬のルーシー

たちと遊んだり、ソフトボール経験のあるレイチェルとキャッチボールをしたりした。その後、オレオとM&Mの入ったミルクシェイクを飲みに行ったが、すごく甘いのに加えて量が多くて途中でギブアップ。アメリカンな甘さは今でも覚えている。その後、「ターゲット」に行って、部活の先輩におみやげを買った。その時にジェレッドやレイチェルも買い物をしていたが、カードを使っていて、日本のようなスマホを使ったキャッシュレス決済はそこまで浸透していないのかなと感じた。

夜はフロリダ流の煮込みパーティー。エビ、ソーセージ、じゃがいも、とうもろこしが入った料理はどれも美味しく、特にじゃがいもとソーセージが印象的だった。スパイスやシュリンプソースをかけて食べる、アメリカンな料理だった。なにより新聞紙の上に完成した料理を置いていてびっくりした。

その後みんなで映画鑑賞会を開いた。上映中に眠ってしまった。洋画だったのだが、歌ったり踊ったりしていて、何でこんな場面の途中で踊るんだろうと言うとレイチェルに笑われた。他にもトランプでババ抜きをした。日本オリジナルのゲームだったそうで驚かれた。その後、日本仕様のタンパベイ・レイズの帽子をもらった。先日ジャパンデーのようなものがあつたらしく、期間限定の帽子だそうだ。帽子の後ろには浮世絵の波がデザインされていて、おしゃれに感じた。

8月8日(金)

朝はゆっくり寝た後、久しぶりのボーリングへ。意外にもストライクを連発で、自分でも驚いた。アメリカのゲームセンターが映画で見るような作りで驚いた。ネオンな雰囲気がオシャレだった。

昼食はチキンを買ってクルーズ船の中で食べた。スパイスと辛いソースの効いた味が絶品だった。サックサクの衣とラー油とスパイスのようなソースがマッチしていて、「Publix」のものとは違うおいしさがあった。この2つのチキンがフライドチキンの中で一番おいしかった。

クルーズでは、タンパベイの自然や生態系について学び、実際にイルカの親子やウミガメも間近で見ることができた。タンパベイは水深がわずか2mととても浅くサメなどの大型の生物もいないため、生態系がとても豊かなのだそう。また、フロリダはリゾート地としても有名だからなのか、別荘が海沿いにズラーッと広がっていて、すごく大きなキレイな家ばかりだった。途中マングローブのような木だけでできた島があり、そこに大量の鳥が生息していた。



レイチェルの運転ではしゃぐ3人



クルーズ船から見るタンパベイと街並み

夕方はレイチェルの家でパーティー。30分ベッドで寝ていると、起きた時に全員が部屋に集合していてびっくりした。まさか全員自分の寝ている部屋に集合しているとは思っておらず、すぐに眼気が吹き飛んだ。その後は自作ピザパーティー。好きな球団のヤンキースの試合を見ていたのだが、レイズファンのレイチェルたちはヤンキースをあまりよく思わないらしく、レイズの方が面白いよと言わ

れて、日本の野球ファンと同じなんだなと感じた。自分はチーズ、きのこ、玉ねぎ、ペパロニをトッピング。とても美味しかった。一方でジェレッドはフライドチキンを裂いたものとたっぷりのチーズをトッピングしていて重量感激しいなと思っていたのだが、ジェレッドが、まさかの1切れでギブアップしていて、爆笑してしまった。付け合せのトルティーヤチップスとアボカドディップも最高。夜はまた映画観賞会を開いたのだが、また観ながら眠ってしまい、起きるとレイチェルのお父さんに笑われてしまった。

8月9日(土)

この日は遊園地「Busch Gardens」へ。

最初に「Cheetah Hunt」に並んだ。ただでさえ絶叫系が苦手で、とても速く恐ろしいほどの落差に並びながら緊張していると、全員から絶対楽しいから大丈夫と言われた。想像以上に怖くて、スピードと落差に圧倒されたが、乗り終わると爽快感があった。もう二度とは乗りたくないけど、すごく楽しめた。

その後、お化け屋敷のようなところに行ったのだが、レイチェルや宇都宮さんがとても怖がっていた。いざ中に入つてみると、とても明るく全然怖くなかったのだが、2人は終始怯えていた。後から聞いた話によると、10月のハロウィンに向けた、セットの紹介だったそうで、実際はしっかりとしたものだそう。途中でいろんな動物を見たりした。ゴリラがたくさんいたことが一番印象的だった。

昼は「Chick-fil-A」でチキンバーガーやワッフルポテトを食べた。ホクホクのポテトが甘くておいしかった。その後、川のアトラクションへ。現地の人と自然に話せる雰囲気が良かった。急流すべりのようなアトラクションで、レイチェルが最後の滝でずぶぬれになった。事前に開催した誰がずぶぬれになるかの予想対決でぼくはレイチェルを指名したため、予想が当たってみんなで騒いでいた。

レイチェルがびしょ濡れになったことをきっかけに、さらに水濡れ系のアトラクションへ。ディズニーのスプラッシュマウンテンとウォータースライダーが合わさったようなもので、とても面白かった。2人しか乗れないほどの小ささなので、必ずびしょびしょになると最高のアトラクションにテンションが上がった。



急流すべりに乗る僕達

最後は絶叫系が苦手な自分を残して、藤井さんやジェイダがジェットコースターに挑戦するのを待ったり、おみやげを見たりした後、帰宅。疲れていたのですぐに寝た。

8月10日(日)

前日の疲れもあり、朝は遅めに起きた。

朝は食べずに昼はアジア系レストランへ。焼売や小籠包が美味しく、牛のスペアリブは最高だった。久しぶりのアジアの味にはっとした。中国人が経営しているところで、日本のものよりおいしく、マ

シゴープリンにいろんなフルーツが乗っているデザートが何よりおいしかった。

その後は自然公園でワニを探す冒険へ。小さなワニや大きなカメにも出会い、アメリカならではの自然を体感した。自然公園に普通にワニがいるなんて恐ろしいなと感じた。

午後は「Walmart」や「Dick's」、「Trader Joes」で買い物。おしゃれなトートバッグや先輩や自分の誕生日プレゼントを選ぶのも楽しかった。ぼくは、Jordan のバッティング手袋を購入した。日本のものと比べ割高だが、デザインがとても気に入っていて、天然の革でできているためグリップも安定している。今ではとても重宝している。

夜ごはんの前には「Phase10」というカードゲームを家族とプレイ。初心者でも楽しめるゲームで、思わず4連勝してしまいみんなに驚かれた。



恒例パーティーの様子



ホストファミリーと一緒に

夜は学校が始まる前の恒例のパーティーが開かれた。1929年からあるお店でロブスター・チャウダーとジュニアチーズバーガーを注文。ロブスターが本当に美味しかった。クリーミーなスープとロブスターの身の相性が最高だった。一緒に食べた人たちもわいわいしていてとても面白かった。アメリカではこんなパーティーが恒例なのだと考えるととても羨ましかった。

最後に全員で記念撮影をした。撮った写真は家に飾ってくれるのだそうでとてもうれしかった。

8月11日(月)

朝はゆっくり過ごした後、スティーブンさんがショッピングに連れて行ってくれた。

まずはお気に入りのセント・ピーターズバーグ市のお店で、キー・ホルダーとポストカードを購入。美しい夜景の写真のものを購入した。QRコードを読み込むと立体的に動く仕組みになっている。訪れた記念のものを買って良かった。

次に訪れたショッピングモールでは色んな店を見て回ったが、特に買うものは見つからなかった。それでも新しい発見が多くかった。アメリカでは、ショッピングモールに行くことは珍しいのかそんなに人はいなかつたが、とても広かった。また、日本とは違い高級ブランド路線な感じがした。

昼食は、牛肉とチーズのサンドイッチ。ソースがなかったものの、チーズと牛肉というコンビがマッ



巨大レッドホットチキンバーガー

チしていた。

午後は再び「Publix」や「ホールフーズ」でお土産を買い込み、夜はついにお別れディナー。オニオンリングは玉ねぎの甘さが引き立ち、ジェレッドおすすめのチキンバーガーはとても柔らかくてジューシーだった。トマトのホットソースとチキンが相性抜群だった。最後にデザートにフロリダの伝統料理のキーライムパイを食べた。とても甘く食べきれなかったが、レモンチーズケーキに似ていた。さっぱりさもあって不思議なケーキだった。

8月12日(火)

この日はついにオセオラ・ファンダメンタル高校で体験入学だ。朝はとても早く、車の中で朝食のベーグルを食べた。

ベーグルとクリームチーズと目玉焼きのサンドイッチはとてもおいしかったのを今でも覚えている。レイチェルのお父さんが送ってくれた。レイチェルのお父さんはこの高校で先生をしており、レイチェルもそこに通っているそうで、いつも一緒に通っているのだそう。

学校では映画、数学、英語、経済、体育、物理などの授業に参加。この学校に通っていて、学校内でもぼくの案内役のセバスチャンに校内を案内してもらひながら、色々な人と話せたのが嬉しかった。いろんな人に日本のお菓子を渡したり、インスタを交換したりした。数学や物理の授業では、関数電卓を使ってたり、映画などの珍しい授業があつたりと実践的な授業がそろっていた。お昼に全員でご飯を食べた。お弁当に作ったサンドイッチとジェレッドが作ってくれたパスタサラダがおいしかった。体育の時間にスポーツの様々な設備を見せてもらい、最後



学校でできた新しい友達たち

に校長先生とも写真を撮り、お土産にインターナショナルスクールのパーカーもいただいた。

学校終了後はレイチェルの家でプールに入り、書道のプレゼント作りをした。色紙に全員の名前の漢字の当て字とメッセージを添えたもの作った。全員喜んでくれてとても嬉しかった。

夜はトマホークステーキをジェレミーが、お好み焼きを自分が作って、ホストファミリーとおじいちゃん、おばあちゃんと最後のディナー。アメリカではステーキソースではなくブルーチーズをステーキにかけて食べる食べ方が好まれるそう。チーズのコクがとてもおいしかった。

お好み焼きもみんな気に入ってくれて安堵した。みんなパンケーキの中に野菜が入っていると言っていた。なんとも面白い表現だなと思った。

最後には、「Trader Joes」の人気バッグやお菓子の詰め合わせ、タンパベイ・レイズの帽子、ジェニ



ゾウイと最後の別れ

ファーの手作りのお皿など、たくさんの心のこもったお土産をもらった。

ローラン、ゾウイと別れの挨拶を交わし、連絡先を交換して、最後の荷造り。忘れられない夜となつた。

8月13日(水)

いよいよ帰らなければならない。アメリカの自由な雰囲気やスケールの大きい建物、いろんな人たちとの交流が気に入り、もうこのままここで暮らしたいと名残惜しかつた。

タンパ空港で最後に荷物を預け、フラミングのオブジェの前で写真を撮つた。最後に全員とお別れの言葉とハグを交わしてシャトルに乗つた。最後に「もう家族だからいつでも帰つてきてくれていいよ」と言ってくれた。その国内線で5時間のフライト後、ダラス空港で最後のアメリカの食事にフライドチキンを食べた。このジャンキーな食べ物が食べられないと残念だった。

その後、しばらくして搭乗時間になり、キャビンアテンダントの方から日本語を聞いた瞬間に一気に肩の荷が下りたような気がした。その後の機内食で出たそうめんやみそ汁を食べ日本食のおいしさを再確認した。

8月14日(木)

羽田に着いた後、そのままこれといったトラブルなく、睡眠を少しあって高松に着いた。空港で荷物を回収すると、もう終わつてしまふのか寂しくなつた。

自分たちで無事に帰れたこと、アメリカでも何の問題もなくコミュニケーションが取れたこと、かけがえのない時間を過ごし、新たに大切な友人、第二の家族ができたことが何にも変えられない一生の宝物だ。

感想文



日米の違いと価値観の変化

香川県立高松高等学校 1年

古市 隼翔

今回の10日間のアメリカ留学は、単なる海外経験ではなく、自分の価値観を大きく揺さぶる体験となった。食事や文化に戸惑いつつ違いを楽しんだり、ホストファミリーと一緒に生活をしたり、市議会でプレゼンテーションをしたり、現地の高校での授業を受けたりする経験を通して、アメリカという国の「人を受け入れる姿勢」を強く感じた。特に印象的だったのは、どんな場面でも人々がフレンドリーに声をかけ、笑い合いながら場を共有する国民性だ。初対面でも自然に会話が始まり、相手の背景や文化の違いを尊重しようとする姿勢に、自分がいかに「相手にどう思われるか」を気にしそぎていたかを気づかされ、自分も自然と自分の考えを同年代の海外の人に共有して意見が聞きたいと思えた。

また、学校体験を通じて、自分の将来像も大きく変わった。授業では先生と生徒が双方向にやりとりをし、自由に意見を述べ合う雰囲気があった。また、数学や物理で計算機を使ったり、いろんな授業でパソコンを有効的に使ってたりする教育の違いも見られた。日本のような知識や計算能力などの脳を発達させる教育とアメリカの実践的な教育を融合させることで、日本はまだまだ成長できるのではないかと考えた。

さらに、ホストファミリーとの交流や友人との会話を通じて、拙い英語でも伝えようとする姿勢があれば相手は耳を傾けてくれることを実感し、語学学習への意欲も高まった。その中で自分のリスニング能力が格段に上がり、語学力が向上した。

これらの経験から、今後は海外の大学進学や就職も選択肢に入れて考えてみたいと思うようになった。単に語学を学ぶのではなく、異文化の中で自分の考えを表現し、多様な人々と協働する力を磨くことが、これから時代には欠かせないと感じたからだ。

アメリカでの10日間は、自分の可能性を広げてくれる大きな一歩となった。